

---

# 唯一のモノ

田中美紗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

唯一のモノ

### 【Nコード】

N8091Q

### 【作者名】

田中美紗

### 【あらすじ】

\* 心の欠片の続編です。

身体の傷は癒えていたが、心の傷はなかなか癒えない。

神の力に恐れを為してしまった神・都は自分自身の力も、奪われてしまった伊織のもとにある力も両方を恐れていた。

そんな都を見かねて和美は、都の神の力を預かり、その代償に都の記憶を奪い去る。

奪われた記憶の中で都は誰を選び、どう生きていくのか？

運命に翻弄された和美と都のリアルを選ぶ。

## 後始末（前書き）

唯一のモノは和美と遙佳を強くするために書いた小説です。

何故かって言うと、和美君はこれからガンバルために。遙佳は元々都が心の欠片で結ばれる相手だったからです。書き直したときに3章半ばで路線変更したため本当にちよい役に变身しました。

じゃあこの話、要らないんじゃない？

……その通りだと思われますが、和美君の諦めの悪さというか、このまま次にコマを進めると色々大変だから和美君一人にいつぱい成長して頂きます。

本当にどんな性格が悪くなっていく子です。もともとは容姿も性格も可愛い設定だったのに、『和美がニッコリ微笑んだ』って文章を書いて、私の頭の中では『和美がニタリとほくそ笑んだ』に変換されちゃいそうです。

もう少しお手柔らかに……………。

## 後始末

たった一つだけ、選んだモノは初めから自分のモノにならない事が決まっていた。

どうしようもないやるせなさも、気付かないふりをしていればただの気の迷いで済んだのに自覚してしまえばちゃんと手に入れたくなってしまう。

幸せを祈るなんて偽善だと思うから。

「ピアス？」

悠宇が左耳に付けたピアスを見つけて訊いてきた。先だつての戦いで傷もようやく…夏休みいっぱい使って癒えた。悠宇はその間走り回り、雑務に追われていたらしい。二人して疲れた顔して、サラリーマンの中に紛れてコーヒーを飲むのは高校生らしくはない感じはする。疲労感が、若さと不釣り合いで笑える。

「昨日開けた。これで都と同じだ」

「ああ、尚哉ともオソロ」

「……放つという」

それでも、自分の正気をつなぎ止めるためにもこれが必要だった。何かが壊れる前に…。

「明日、本家に行くんだろ？」

「悠宇は？」

「俺は長男じゃないから行かない」

「俺も長男じゃないけどね」

「やっぱり行くんだろ？頼りない兄貴を持つと大変だな？」

「頼りない…わけじゃないんだけどね」

力無く笑った悠宇の言葉を肯定したみたいで罪悪感が込み上げる。

それでも自分の背負っているモノはいつまで経っても軽くならない。何をして、何年経ってもこの『沖野』という家が錘のように

足にぶら下がる。

いつそ長男なら諦めもつくのに…。

「ってか、母さんなんだよな」

問題は…あの強欲女だ。

沖野晴美。沖野家現当主で自分と兄、匡美の母だ。強い能力を重んじて、そのせいで能力を見出だされなかった兄は未だに沖野家の敷居をまたがせていない。

ずいぶん長く自分自身帰っていないが今も取り付かれたように権力拡大に奔走してると思うと……。

アレの血が自分に流れてると思うと身体中の血液を抜きたくなる。本当に不肖の母親なのだ。

都と婚約した時はやはり血筋を喜び、でも無能力をさげずんだ。彼女を家に入れたら間違なくいびられるんだろうな。

「執念の人だよない？」

「悠宇？」

「尊敬に値するくらい権力にしがみつく執念深さだと覚えたのですか…？」

「あーあ、まあ類い希な諦めの悪さだな」

悠宇にかかればそんなもんか。そう思えば渴いた笑いを浮かべる余裕も出てくる。

そもそも都は沖野の家に大人しくおさまりはしないだろうし。このままいけば自由の身になれて念願の尚哉との結婚だって夢ではなくなっているのだろう。

今や絶対権力者『都様』なのだから、自分の出る幕じゃない。

「遙佳は来るのか…」

「あー…うん…だな」

「じゃあ遙佳に相談しよ」

「何？ボクじゃ役不足だってーの？」

「ってか…好きな人の幸せの祈り方を忘れちゃって」

「ああ、良いんじゃない？不幸になりそうなら支えてあげれば良いん

だよ。幸せには自分であるのが一番良い」

「悠宇…」

「少なくとも俺はそうする」

いつもチャラチャラ都に接する悠宇も彼女の事が好きなのは知っている。でもそんな風に考えて遙佳とくつつけようとしていたとは……そんな風に考えて尚哉をたき付けたとは思わなかったよ。結局どの角度から見ても見ても都と尚哉という括りが一番良いと言う事か…。

「でも都の事が好きで止まらないんだ。俺は今現在は彼女の婚約者なんだよ？」

「ソウダネ。それが意味ない事だつて分かってるでしょ？」

「俺のが強いのに…」

「……やっぱりキミは晴美様の息子だね」

「俺のが優しくできる」

「アンタこの間都と嫌味合戦してたじゃん。手こそ挙げないけど口だけなら尚哉より酷いじゃん？」

「悠宇は誰の味方???！」

「そりゃあ…」

ニコニコつと作り笑いした悠宇がその先を続けなかったのは言わなくとも分かっているからだ。少なくとも自分の中でも尚哉のでもない事。

思惑は人それぞれ、と言う事。

「俺は一応和美の幸せも応援してるよ？」

「アリガト」

「ホントだって!『ガンバレ』でも都と和美は幸せになれそうにないなあ」

「…都と幸せになる結末を応援してよ!」

「ダメ」

背の高い悠宇が立ち上がり、髪の毛を掻き回した。

まだ熱い八月の終わり。

鎌倉の夏は観光客が多くてわざわざ出向きたい場所ではないな。天気が良く、観光日よりな今日は、駅からここに来るまでには渋滞に掴まって大変だった。約束の時間ギリギリで時計を見遣りながら溜め息を吐く。

それでも急ぐでもなくマイペースに遅刻は仕方なしとしてタクシーから降りると支払いを済ませて本邸に向かおうとした。

「カズミちゃん？」

後ろから掛けられた声の主をゆっくり確認した。確認しなくとも自分をそう呼ぶ人間は一人しかいない。

「久しぶり」

桜花に微笑んだ。怯んだように立ち止まる彼女の反応は正しいだろう。自分達は、こちらの一方的な都合で別れたのだから。

少し髪の毛が伸びて、少し痩せた彼女は前よりキレイになった。

「ひさ、ひさ、…」

「落ち着いてよ」

「久しぶり…だね？」

「うん。桜花ちゃんは元気になった？」

「うん」

あんまり元気そうに見えないがそう気丈に答える彼女はさすがだ。そう言うところは本当に好きだったよ。でもそれは都に、似てるからだ。

「今着いたの？もう九希には会った？」

「あ、私はもう話は終わったの。皐月の事もあるからあんまり長居できなくて…」

「そう…」

「……私、尚哉と正式に婚約解消したわ。自由にしろって言われた。カズミちゃんも……アナタもそれについての話があるんじゃないかしら？」

それだけ言うと自分と擦れ違い、タクシーの方へ歩んだ。そこに

更に一台タクシーが入ってくる。

降りて来たのは都と尚哉。

桜花は会話すらせずに二人の乗って来た車に乗り込む。

それが桜花らしくて少し和んだ。

向かってくる都が少し緊張している。自分だつて…だ。一週間前に新宿で一回会ったが、ろくに会話出来なくてどんな顔して良いのか分からない。

「都と尚哉も今から？」

どんな顔になったかは分からない。でも声はうわずってはいなかった。前の自分とは違う。虚勢も張れるぐらい心も強くなった。

「和美も？藤井さんは帰っちゃったけど…」

「桜花ちゃんは皐月の事があるから忙しいって！」

「へえ…この間ご焼香行こうとしたんだけど…」

「俺は墓参り行つたよ」

「私は門前払いされた。まあ…殺人犯の身内なんでナントも言えませんね」

ふうつと溜め息吐いて都は参っているようだった。彼女も少し痩せた。

力が戻って外見の印象も少し変わったが、中身は元のまま。何か精神的にあると、食が細り、代わりに性に逃げる。昔はそれでも素直に口に出たから良かったが今は隠すから解せない。

悠宇みたいな口振りで茶化して誤魔化すのは…。

「都？ちゃんと食べてる？」

「食べてる、よ？」

「嘘つき」

そう言つて都の顔に触れて掴めない肉を無理矢理摘んだ。

「いひゃい」

「頬から肉が無くなってる！コケた！これ以上痩せると幾ら基が綺麗でもガイコツみたいだね。ギスギスで醜い！」

「…………食欲あんまりないし別に美しさ磨いてないから良い」

「無くても食べなきゃ」

「食べても吐いちゃうもん」

「じゃあニンニク注射でもうつて来い」

「うん…でもホントにだいぶ食べれるようになったから心配しないで？」

あ、蚊帳の外。

尚哉の身体を掴んで放さないのは自分に怯えてるからだ。

「中、行こう？時間だから」

「ああ」

尚哉が身を強張らせた都の腕を掴んで引き摺るように引いた。都が泣きそうな顔を見せる一瞬。でも彼女はそれも泣かなくなった。強くなったのか、弱くなったのか…。

「尚哉はどう？事後処理としては桜花ちゃんと一緒じゃないの？」

「なんで？奈月は従妹だから別にそんなでもない」

「そう…」

「お前だって…沖野は大変だろう？」

「え？」

「知らないのか？」

「何？母さん何かした？」

「都との婚約解消を拒んでる。それどころか谷口都を一重都として当主に坐らせろと…」

「当主同士は結婚出来ないのに？」

桜花の婚約解消はそれを理由にさせるんじゃないのか？

まさか…？

「お前は次男だから当主じゃないんだって」

「……………今更」

やるせない怒りが込み上げてきた。

全ての権力を掌握しようとする母にとっては自分達は道具でしかない。今まで兄を自分の息子とは認めなかったのにそれ以上の権力を手に入れるチャンスと知れば掌を返す。

苛々しながらも母屋に入るといつもの痛いぐらいの神聖な空気に癒された。だが、その中に人の念が混じる。

「伊織ちゃん…」

「え？」

「いや…」

都が名前に反応して泣きそうな顔をした。

そして人目を憚らずに尚哉の手を取る。それが逃げである事も分かっている…。

「都…」

「和美くん、私は結婚しないよ。当主になる気も無い」

「…一重都和結婚する気は俺にもない」

「谷口都に、ないの」

「俺は、君の事が好きだよ。だから、今この問題があるうちは結婚がどうの何てとても言えないな」

「和美くん…」

「ちゃんと解決させるから」

そんな泣きそうな顔を…。

尚哉が睨んで都を自分から離れた。そんな尚哉に言う。

「過保護」

「お前に言われたくない！」

「俺はちゃんと都を戦力認識出来るよ」

「ソーデスカ」

「尚哉だってちゃんと見ろよ」

いつまで経っても都をお姫様扱いする尚哉と自分では考え方が違う。

「俺は『都様』を好きな訳じゃないから」

都が目を見開いた。

「コイツがただの人間でも、神様でも関係ないよ」

「えっ！ウソツキー！」

尚哉の言葉に敏感に反論する都に驚いた。

自分に対してはいつからか怯えるような目を向けるのに尚哉にはちゃんと言い返す。

「嘘じゃないだろ？結界士だった時から付き合ってきたじゃん？」

「でも散々強い、弱い、の線引きしてきたじゃん」

「足手まといは要らないからね」

「今はどっちが足手まといなんだかね！」

減らず口の都の頬を尚哉が引つ張った。それでも自分と話しているよりもずっと柔らかい表情の都はいつから自分の前でそうしなくなっただろう？

『好き』って伝えれば伝えるほど頑なにその表情を強ばらせる。やるせないな。

「いひゃあい」

そう言う都が逃げずに尚哉の胸に飛び込む。尚哉の腕が優しく都を包み込んだ。強く抓られた頬は少し赤くなっている。でも都は幸せそうに尚哉の腕を選ぶって事。

「行こう！」

強く言ったらまた都が泣きそうな顔をした。ああ、彼女はこれから言い渡される事を怖がっているのか…。

九希の待つ、広間の前で暗い表情をした都の肩を尚哉がトンと押した。都が少し安心した顔で中に入るのを見て…自分の中に物凄い嫉妬の心を感じた。

九希は物静かに外を眺めていた。

未だに自分にとって神聖なイメージの取れない彼も、疲弊の様は見て取れる。

「良く来たね」

「九希ちゃん元気？」

「ああ」

微笑んだ彼は相変わらず綺麗で、少し安心した。おそろいだった金色の瞳も、今は彼の瞳にはない。

自分の目は未だにオッドアイなのに、だ。

「三人とも座って？もう遙佳も来るから」

ソファに薦められた瞬間に扉が開かれて遙佳が入ってくる。こちらを見やるといつも通りに優しい瞳で微笑んだ。

「座りなさい」

全員着座するのを確認して九希が話を始めた。

始めは事後処理についてから、ゆっくりと自分達についての罰則について入って行く。

「一重的には、君達は重罪に当る行為をした。特に、都と遙佳と伊織」

その場にいない妹の名に身体を震わせる。尚哉の大きな手が自分のそれを包み込んだ。

「邪者に下ろうとした罪は重いが君はあくまでも『都』だ」

「ナニソレ？神は罪に問えないって事？」

「一重一族は『都』様の為にある。罪も何も神の思し召しを否定したら存在価値もなくなるよ」

「私に何も価値が無い事は、みんなが一番知ってる」

「都は僕にとっては大事な妹だよ」

少しだけ寒気を感じた。彼が自分にそれ以外を見ていた事を知ってしまったから。

「罰則は？」

「都には無いよ。遙佳には…」

「遙佳に罪はない！私が選んだんだからっ！」

「遙佳は脱走、文化財持ち出し…これは仕方ないだろ？」

「あ…それだけ？」

「ああ。都を唆したのは無かった事にしておいたよ」

脱力して胸を撫で下ろした。罪を削ぐのにこの兄はどれだけ奔走したのだろうか？

涙が出てきそうになる。

「遙佳には真前による罰金と、遙佳と悠宇による労働。仕事が始ま

るまでは謹慎を…」

「はい」

その程度ならみんな覚悟していた。

ただ、伊織に対しては？

「伊織は…罰則を受けられないかもしれない」

「え？」

「あれから目覚めない」

愕然として全身から力が抜けた。

伊織は殆ど無傷だった。いつもと違うとしたら…自分の力を受け入れた事。仲間殺し。そして自分からの呪いの言葉。

「都、取り敢えず今日のところは自分の力を取り戻しなさい」

「ええ？」

「伊織の身体の負担を減らしてやって？」

右目の力。

都心を破壊し、奈月と皐月を殺した力。伊織の正気を奪った恐ろしい力。

「私…」

正直言つて嫌だ。

殺しをする為の力を自分の中に取り込む嫌悪感はきつと今までが『結界士』という攻撃に関与しない力を持っていたからだ。でもそれだけじゃなく嫌だつて…。

「伊織は眠ったままのが楽だね。こんな現実を見ない方が幸せだよ」  
固まっていた自分に対してか…独り言のように和美が呟いた。目をギュツとつぶって暗示を掛けるように心に言い聞かせる。

（大丈夫！私は狂ってはいけない！狂ってる暇はない！）

「わかりました」

「奥の牢に幽閉を兼ねて寝かしてあるから終わったら行きなさい」

「はい」

答える自分を待たずに九希の手元にある書類は捲られる。これだけじゃない、と。

「尚哉は桜花との婚約解消が成立したよ」

「ああ。藤井には違約金散々積んだからな」

「根回し有り難う。でも都和美の婚約は…」

和美の方を見やる兄の視線でその場の人間に伝わった。沖野のワ  
ンマン当主が許さないということを。

「そつちに金積んだ方が良かったかな…」

冗談にはならないその言葉…。自分との婚約を手放しで喜んだ和  
美の母親を…甘く見ていた訳ではない。

「私に出来る事は？」

「この件において都には何も出来ないよ。和美が頑張るしかない」

「でも…『都』なら神様なんでしょ？」

「神の婚約者なんて絶好の身分を与えてはいけない。そう言うこと  
だよ」

そう、だ。ただの結界士と婚約したんじゃなく、九希の妹だと分  
かって婚約したあの浅ましさを…忘れてはいけない。

急に神聖なはずのこの屋敷に数々の怨念を感じて気味悪くなった。  
一族で伸し上がる為にどれだけの人間が血と汗と涙を流して来た  
のか？

特に、一族に役目を持たない藤井と沖野と飛澤。

残念ながら子供のまま、政に関わる前に殺されて来た『都』の記  
憶には存在しないから分からない。

いや考えないようにしてこの屋敷の闇を無視してきたんだ。

今、自分の頭は大量の情報に占拠されている。自分のものじゃな  
い記憶に毎晩うなされて、毎晩考えている。

この先どうしたら良いか、をだ。いい加減疲れて、もうどうでも  
良いかもしれないと思ったが…。

それでも尚哉が毎晩泣いて取り乱す自分を押さえ付けて生かして  
来た。生きて償わなければいけないのは自分だ。

生きて、生きて、生きて…その先に見つけなければいけない。自  
分達の進むべき道を…。

名前を聞くだけで吐き気が蘇って来る。

この嫌悪感は時間が経った今も薄れる事なく続いていた。

伊織、九希、自分は何もかもが終息した今も鎖に繋がれている。解放の手段すら分からずに、今はただ吐き気にだけ囚われていた。

（馬鹿だな…）

和美が言った『伊織の力を頂戴』って言葉だって…そんな簡単にいかないはずだから…。

自分が赦せなくなる前に断らなければいけない。これは自分達の問題で尚哉にも和美にも解決して貰ってはいけないのだから。

多分今泣きそうな顔をしてる。

和美にも尚哉にも見られなくて前を歩く九希に並んだ。九希が少し困ったように並ぶ。彼に自分を慰める資格はないから。

だから彼にだけ隣りに立つ事を赦したのだ。

九希が小声で、後ろに聞こえないように気を遣いながら話し掛けてきた。

「どうするんだ？和美から伊織の力を譲り受けると申請があったが…」

「ダメだよ…だって私の罪を人に押し付けてどうするの？」

「都…もう前世に囚われている必要ないだろう？君にその名を付けてしまったのは僕だから説得力ないかもしれないが、君が『都』という名前じゃなければ少し考えも変わったんじゃないのか？伊織に『都』と名付けて、君が『伊織』だったなら？」

吐き気と頭痛が酷くなった気がした。もしも、伊織と自分の立場が逆で…でもあの『都』はこの身体と心から出てきた。つまり創ったということ。

環境が揃えばこの世界は無かったのかもしれない。琥雷の目的は達成されていたのかもしれない。

「変な事…言わないで」

「都…」

「化け物を生み出したのはこの私よ。伊織じゃない！罪を履き違えたのは私よっ！償う必要があるのは私なのっ！いい加減にしてよっ！！」

血を吐くように言った。

誰かつ！

誰でも良いから私を責めて！

私を赦さないでっ！

ずっとずっと代わり番に慰めにくる仲間達に言いたかった。そして言うのが怖かったセリフを…このタイミングで吐いてしまった。間違った…これはエゴだ。

これでは誰も償わせてはくれない。

でももう止まらなくて、一重本家の長い廊下の真ん中でしゃがみ込んだ。声にしてしまったら何もかも無くしてしまいそうで…泣いてしまえば零れていきそうで涙が出なかった。

「ダメだろ？」

「尚哉？」

「生きて償えって伊織に言ったよな？」

「うん…」

「オマエにそっくり言うよ。生きてちゃんと終わらせる。オマエの子供がその罪を負わなくて済むように悔いなく生きる」

「なっ…おや」

「ちゃんと立って着いて来いよ？その力が無くなっても俺の歩くスピードは変わらない」

「尚哉…」

「まあ手ぐらいは貸してやるよ」

そう言っって尚哉の手が差し延べられた。甘えない自分が甘えられる境界の位置に手を差し延べてくれる。

絶妙で笑えた。

ゆっくりと尚哉に支えられて起き上がる。揺らぐ視界を必死に正して、ふらつく足元を必死に踏ん張ってそれでも尚哉はただ手を繋

ぐだけ。昔なら抱き上げてくれたかもね？

水分が下に流れ落ちる。久々に涙を流す感覚。この人の前ではどうしてこんなにも泣いてしまうのだろうか？

方向は尚哉に任せて、引き摺られるように歩いた。自分の足で。だからかな？昔よりもうれしくてまた涙が出た。

涙には二種類あるんだよ？

辛くて痛くて絞り出すような涙と、嬉しくて温かくて生み出すような涙。

解決にはまだ遠くて、でも伊織に向き合わないとそれは逃げていくだけだ。

当事者を前にしないで話し合った所で何も変わらないんだから。

地下に下る階段に差し掛かって足を踏み外して尚哉にもたれかかった。

「オマエ…」

「ん？」

「目が…」

「足…纏れちゃった。ここ暗いから」

微笑んだ自分の身体を起こす腕は九希だ。視線を動かさずに彼の腕を拒否して自分で立ち上がった。

和美の大きな溜め息が聞こえて恥ずかしくなった。こんな事でいざこざ起こしてどーすんの？？って言われてるみたいで。

「早く行こう？伊織が待ってる」

「うわぁ…なんか笑えないし」

「和美！笑いたくて言っただんじやないのよ」

「ワカッテマス。都、あからさまに避けんの失礼だよ。俺に対しても…」

九希に対しても…と続けないのは和美の優しさか…。

座敷牢のようになったその場所に死んだように安置されている妹の姿は壮絶だった。点滴を受けていて管を色々繋がれて自分の口にした言葉通りに生かされているその姿。

後退りしそうになった。

逃げてはいけないうって何度言い聞かせても本能で拒否してしまう。消毒液の匂いに交じってこびりつくように香る血の匂い。座敷牢ならではの畳に染み付いてしまった自殺の跡。

「報告によると手首を切っても死ねなかつたらしい。手首を切り落とそうとしたが超回復が起こって伊織の身体を生かしている」

淡々と言う九希の中には伊織を妹と思う心はあるの？

伊織の回復をしているのが自分の瞳の作用だと知って気色悪さを覚えた。

死なせない力。

生きる価値を変えてしまう。

こんなのは生きてるんじゃないかって死ねないだけなんだ。

「どう、しよう…？」

呟いた言葉に遙佳が目を向けた。

「私、今まで命の犠牲を払う事が嫌い…ね」

「都ちゃん？」

「死ぬかもしれない可能性があるならやらない方が良いと思ったし、死んでまで得るものはないと思ってた」

「うん」

「得るもの…あるじゃん」

死ねば楽になれる。

だって生きてないんだから。

根底から覆された気がした。

「ごめんなさい。私…無理だ」

「え？」

「あの、和美くん…」

扉の前でまるで自分が逃げない様に見張るかの如く立つ和美を見た。冷静に立つ和美に向かって頭を下げた。

「よろしく願います。私の心がブレなくなるまでアッチの力を

…」

「都の方の力も受け取ってあげるよ？そしたら君はもう一度結界士だ」

「出来るなら…」

「じゃあおいで？」

初めて、和美の中が大きな闇で覆われている事を知った。

自分を包み込む腕はこれから心を犯していく。

深淵ってこういう事を言うんだ。悲鳴をあげそうになった。自分の力を根こそぎ剥されていく感覚に。

自分の光を奪われて闇の色をのせられる。

凌辱にも近いその行為に目に涙が滲むのが分かった。

痛い…息苦しい…助けて…助けて…尚哉っ！

「尚哉ばかりだな」

低く魅力的な声が脳に響いた。それが和美の声だと理解出来た頃にはちゃんと視界が開けていた。

（目が…見える…）

もう長くちゃんと見えていなかったその目を確かめるように前に掌を出した。

「俺のは九希と違うからちゃんと見えるように出来るよ。見えていなかった所を見たら失望するかもしれないけどね」

「和美…」

「交換じゃないから俺の力を与えたわけじゃない。でも等価交換だよね？尚哉を好きな君の気持ちを頂こうかな？」

言われて逃げる様に和美から身を放した。尚哉の後ろに隠れるとクスクス和美の笑い声が響く。

「ウソ。好きな人の心を操作するのはさすがに嫌だな」

自分の身体を守る様に抱き締めた。心ごとあの闇に支配されてしまいうで、身体の底から洗い流してしまいたい様な嫌悪感。

震える身体を尚哉の手が強く抱き締めた。

「和美…」

「都、次は伊織だ」

そう言って伊織に手を掛けようとする。

「ま…って！」

「都？」

和美が振り返った瞬間に伊織の身体が空間の狭間に取り込まれていくのを感じた。

「あ…いお、りいつ…！」

「都！行くなっ！」

「伊織がっ…！」

「もう都は結界士だ！和美に任せろ！」

その瞬間に責任放棄の罪の重さを知った。手の中に残ったのは無力という名の枷。

伊織の身体は事実上のもぬけの殻となってしまうた。

都の力を奪い取る隙を狙って伊織は…というか『都』の力は逃げ出した。

それをこの目で見ていた。

さっそく都の身体を和美から奪い返すと微笑んで彼に言う。

「じゃあよろしく。都サマ」

言葉に反応したのは和美じゃなく都だ。腕の中でだぁーっと滝のように涙を流す。

『都様』では無くなってしまった事を彼女は悔いるかもしれないが自分にとっては都合が良い。流す涙に口付けて唇も奪った。

目を開けたままそのキスに応える彼女をそのまま抱き上げて部屋を出る。九希が顔をしかめるのを見て、彼に問う。

「もう用事はないよな？」

「尚哉…伊織は…」

「身体を見ろ！瞳の色はちゃんと黒に戻ってるよ。コイツと一緒に

只の人」

「……」

「九希、只の人間なら帰っても良いよな？」

九希が少し困った顔をしたが事実だから認めたように頷いた。そもそも彼に許可出す権限が有るのが一番あやしい。

頭を撫でてオデコに口付けし和美に宣戦布告するようにその場を去る。

和美が睨むのも気にせずに…。

と言うか、今この場にいたら済し崩しに都を奪われそうで怖かった。

放心状態の人間に決めさせるべき事ではないのだから。

座敷牢を出て階段を登りながら微動だにしない都に話し掛けた。

「都…」

「……」

「返事くらいしろよ！」

「……はい」

小さな返事。抑揚の無い声。少し寒気がする。このままだったら何もかも崩れてしまうから。

「都、オマエさ…」

「尚哉、聞いて」

「うん？」

「私…伊織を妹なんて思った事一度も無い。どちらかと言えば『女』として…ライバルとして見てたよ。だから…っ」

涙が粒になって自分の肩に降り注いでいく。

止めどなく溢れるその思いをただ聞いてやる事しか出来ない。

「都、九希と今度ちゃんと話してご覧？『都の力』を抜いたなら九希フェロモンからは解放されてんじゃない？」

「……なんか最近はそれじゃなくても九希が嫌だな」

「反抗期？」

「身内だと思っていた人から欲情される事がこんなにも嫌悪の募るものだと思わなかった。自分だって九希の事が好きだったのに自分勝手でしょ？」

「なんだ…オマエちゃんと九希の事は割り切ってたのか…」

「割り切ってるかは分からないけどね、九希の事が今は許せないから」

「なんで？お前の事を好きだけで罪？？」

「そこじゃないの。引つ掛かるとこは私と九希の間にあるものではなくて…」

「伊織？」

「…うん。伊織は私の代わりにされてたのかな？なら私に成り代わりたいって思う気持ちも、憎む気持ちも必然で…神様になったのに分らない事ばかり増えてく」

「神様ねえ…」

「私なんかおかしな事言った？」

「おかしいデス。お前は神様クラスの力を持つてるけど神様じゃないんだ」

「なっ！？」

「いくら頑張っても全知全能じゃないし、もしくは何もかも叶うのかもしれないけどお前は人間として解決しようとしてる。神様だつて言うならその力をフルに遣ってみせればいい。逃げてないで向き合えばいい」

「…意地悪だ」

「知らなかったの？」

「知ってる…」

口を尖らせてすねる都をゆっくりと地面に降ろす。

「目が見えてなかったってのも初耳だな」

「え？」

「オマエは何でそう言う相談をしないんだよっ！なんで和美が先に知ってる！？」

「ええっ！？和美に言ったわけじゃないよお」

「当然だ！」

「でも尚哉にはバレたくなかったから必死に隠しました」  
平手で軽く頬を打つと都が笑った。

笑う場面じゃないから眉を顰める自分とは対照的で…。

「おい！」

「あ、ごめん。尚哉が最近私に腫れ物触るみたいに遠慮してるから嫌だったんだよね。叩いてくれた方がスッキリするからさ」

「…都たちは俺を蚊帳の外扱いするから」

「え？」

「関係ないって言われたらさすがに口出せないんだよ」

「そう言うわけじゃないよ。でも尚哉に頼ってちゃいけないってずつと言い聞かせてるから…」

「なんで？」

「だって尚哉はずっと私のものじゃないでしょ？いつか飛澤の家が決めた人の元に行くでしょ？」

「行かないよ」

それだけ言うと都の手を握った。長い長い廊下を二人でただ歩く。都の手は熱いぐらいの熱を持っていて…。

「都？」

「あ…っ今…こっち見ないで…」

そう言って顔を隠そうとする都は顔を赤らめていた。

「何欲情してんの？えっちい」

「ばっか！違うよっ！！」

「へえ、そうなのお？」

「意地悪っ…」

「最近俺ら付き合ってたのかよくわからないからさ、ちゃんと言葉にしてお願ひしないと伝わらないよ？」

「本当に意地悪…」

「意地悪かな？都のワガママに比べたら可愛いもんだろ？」

「…………じゃあいいもん」

「言わなくて良いの？じゃあ帰ろう？」

手を放して門番にタクシーを呼ぶように申し付けた。

都が不安な顔をしてこちらを見上げている。

「無理強いしないように気を遣ってるんですが？」

「そんな気の使い方要らない」

「どうして欲しいのか言わないと伝わらないよ？俺は神様じゃないからね」

「一緒にいたい」

「いるだけ？」

「キスして…？」

チュツと軽めのキスをした。不満げな表情。

「違うう…したぁいい…」

「何を？」

「尚哉が欲しいい…」

「はい。よく出来ました。今日はうちに来る？」

「うん！」

大切な宝物のように、胸に飛び込んできた都を包み込んで抱き上げた。

「以上が議会の一年間の活動です。質問あったらどうぞ？」

九月は一年間の簡単な説明とともに後期役員への引き継ぎが始まる。

二期連続役員の自分や華月には全く関係ない。

いや、逆に三役に就いてるから関係は大いにあるか…。

議長・沖野和美と書かれたホワイトボードを見やった。こんな時間有ったら都の様子を見に行きたいのに…。

特に無関心で質問が無さそうだったので華月を振り返る。微笑んで了承されたので打ち切りして議会を閉廷した。

ざわめく会議室も音の波は徐々に小さくなり、学生たちは下校につく。

華月がプリントの束を持ってアンケート結果の報告のため先生のもとへ出て行く。自分も荷物をまとめて隣の議長室へ向かった。議長になると部屋が一つ自由になるのがこの面妖な仕事の特権だ。

「和美」

声を掛けられて顔を上げた。音楽科のベージュのジャケットに身を包んだ尚哉が待っていた。真っ黒の特進の喪服のような制服と違い、見栄えのする制服は尚哉が着ると更に映える。議会は音楽科の生徒が殆ど居ないから今日は特に思った。

「なに？」

「お前が呼び掛けても逃げ回るから」

「今こっちも色々忙しいんだよ」

「俺も暇じゃないんであんまり逃げ回らないでくれ」

「逃げてない！」

「なら話そう」

尚哉が顎で部屋を開けると合図した。鍵を使ってその扉を開ける。この一か月逃げ回っていたのは事実で、それを認めてしまうと芋づる式に色々認めなければいけなくなるようで…嫌だった。

中は簡単な応接セットと作業台があるだけだ。応接セットに尚哉が足を投げ出して座る。

「座れよ」

偉そうに言う尚哉に呆れながら席に着いた。華月が帰って来るまでなんとかやり過ごしてうやむやにしたいところだ。

「伊織は探してるのか？」

「妙な事を言うね？伊織なら一重で寝てるんじゃない？」

「伊織の力を逃がしたのはやっぱりお前か…」

「なんで？」

「俺は見てたから」

尚哉の目が淡く光った。赤い力を持つ彼を騙しきる事は出来なかったようだ。

「不可抗力だよ」

「別に構わないけど都にこれ以上は…」

「尚哉は都が戦うのは嫌だよ？この力…」

右腕を挙げて力が舞うのを見せつける。正直この力も手に入れた

瞬間はどうしようかと思った。尚哉の色が染み付いていて、扱いづらい。

無理矢理従わせて奮うと尚哉が呆れたように肩を竦めた。

「都に返らない方が嬉しいんでしょ？」

「そんなことないよ」

「へえ…そりゃあ意外だ。尚哉は自分より少し弱いくらいが好きだと思ってた。奈月とか桜花とかが本当は理想的だっただろ？」

「俺は同じ事をお前に言いたいよ。じゃじゃ馬は面倒だって言うてただろ？」

「ただのじゃじゃ馬なら面倒だね」

「話し戻すけど伊織をどうするんだ？」

「捜すよ？当たり前だろ？」

尚哉が渋い顔をした。

自分の本心が読まれているようで嫌な感じがする。

尚哉の力は他の能力者よりもこちら側に近いから目障りだ。

都の横に立てる能力者は自分だけでいい。

都の力になれるのは自分だけだと分からせなければいけない。

尚哉も遙佳も…九希も…都の前から消さなければ…。

いつからだろうか？和美の精神が冒されていると感じるようになったのは。

都の力を奪う以前より力の強さに冒されている。

都のあの力にはそのくらいの影響力があつたのだろうが、その前からだとすれば和美の前世の力によるもの。

都が転移結果を張った時に全て解決出来たと思っていたのに…。

「心配しないで？ちゃんと伊織は捜すから」

和美がそう言うのと同時に扉が開かれた。華月と都が入って来る。

「尚哉あゝ」

「用事済んだ？」

「うん！」

都の明るく弾んだ声に少しホッとした。

和美が目を見開く。

「み、都？ナニソレ？？」

「あ！制服気付いたあ？今期から音楽科に転科しましたあ、制服ちよーお可愛いの」

赤いリボンがついたベージュのブレザーは今の都によく似合う。スカートの端を持ち上げてくると回ってみせた。

あんまり素行の良い方ではない彼女が特進から音楽科に転科するのは並の苦労ではないだろうがそこをいとも簡単にやってのけるのが都だ。

和美が拳をギュツと握って小さな声で「なんで？」と尋ねた。今にも爆発しそうな心。

皐月や桜花のあの時と似ている。

「やつぱり音楽やりたくなっちゃった。だって私、谷口と縁切られちゃって蔵守も出来ないし、進路を真面目に考えなきゃじゃん？」

「転科なんて…よくできたね？」

「まあ、ねっ！学年一位の成績を取ったから殆どの般教が免除だし、半年間実技授業選択してガンガン鍛えればなんとか追いつけそうじゃない？」

「一位？桜花を抜いたの？」

「私を誰だと思ってるのよ？」

ふふん、と鼻で笑って腕を組んで踏ん反り返る。

居丈高の態度も実力が伴えば文句はない。

和美はこちらを強く睨んだ。

「誰の入れ知恵？」

「失礼だな！私が決めたの！」

「へえ…」

「一学期間だけクラスメイト楽しかった。アリガト！」

都の清々した顔がおかしくて少し吹き出してしまった。和美はムツとしながらも何も言わずに都から視線を反らす。

その際に都は自分の横に立つと華月に向かって手を振る。

「裕子！またねーん」

「都、今度はちゃんと連絡して行方不明になってね？」

「……………それって行方不明って言う？」

「言うわよお！居場所言わなければ立派に不明よお！」

「はあい。雲隠れ前には一報入れさせて頂きますう」

「よろしい！尚哉センパイも御機嫌よう」

満足げに華月が微笑んだ。

和美には目を合わす事無くそこから出る。

元気だったはずの都が静かに隣りを歩くから心配になって覗きこんだ。

「都？」

「なんか…和美くんのオーラが怖かったあ」

「ん？」

「なんつーの？採って食われそうっていうか…」

「肉食獣かよ？」

「最近その親戚っぽい目で見るとのよねえ。なんか急に本性見せ過ぎじゃない？」

「本性？」

「うん。出会った時から心の闇があっただっていうか…」

「闇…」

「尚哉と和美学くんなら和美学くんの方がヤバいってハッキリ分かるくらい闇！」

「闇はアレかな？育ちのせい」

「あそこの親は手つけられないもんねえー？モンスターペアレントってああいうのを言うんだと実感させられたもん」

「母親だけだろ？父親はまともだよ。もっともまともだからついてけないんだろうけど。アイツ…和美も浩美も母親の方に似てるな」

「お兄さんは浩美…っていうの？」

「ああ」

都がふうーと溜め息を吐いた。窓の方へ視線を映して何を考えているか分からないように表情を消す。こんな時は内容を訊いても無駄だ。

「お嬢さん、溜め息吐くと幸せが逃げますよ？」

「大丈夫よ？ここに幸せ製造マシンが有るもの♪」

そう言つて繋いだ手を口許に持つて来て手の甲にキスをした。

「相変わらず微っ妙なネーミングセンスだな」

「失礼だな！マッチしてるじゃないか！」

「どっちが失礼だよ…」

破顔すると襟首をグイッと引き寄せられて口付けされた。

応じて都の細いウエストに手を回す。刹那的な求め方は相変わらず。でも確実に彼女は変わった。

身体を抱いたままで眉を寄せると都が不思議そうに首を傾げる。

「都は何か変わったんだけど何だかよくわからないな…」と

「変わったのは私？尚哉じゃない？腫れ物触るみたいに他人行儀」

「一度拒まれた傷は深いんだよ」

「尚哉のしたいようにしなよ。私もしたいようにするからさ」

そう言つて勝ち気に微笑む彼女を音楽科のレッスン室の方へ引く張った。

「帰らないの？」

「オマエが挑発するから帰れなくなつたんだよ」

「ん？」

レトロな建屋に入ると特進の一年の女子とすれ違った。

（こんな所から特進？迷子か？）

と顔を覗くと『谷口都』にそっくりで息を呑む。

昔の…だ。都も気付いて視線をやった。

「気持ち悪…」

小さな声で都が言った。ドッペルゲンガーでは無い事は二人共理解出来てる。あれは実在の人間だ。

だが本物の妹よりよほど姉妹のように見えるその娘、伊織が居な

くなつた事を考えると全く無関係じゃなく思えて二人でその姿を見えなくなるまで追い掛けた。

「尚哉、良かったじゃん？昔の私みたいなの実在したよ？」

「顔形で好きになつたわけじゃないって何度言わせるんだよ。オマエの事を愛してるってちゃんと身体に分からせてやるからこつち来い！」

「あはは、はあい」

レッスン室に鍵掛けて、愛しい君にたくさんの愛を説こう。

都が泣きそうな顔して身体にしがみつくのが可愛くて仕方ないんだよって。

「え？」

「だから…沖野が休んでる間に決まつた後任が来るから半年間で引き継ぎしていくよ…って」

華月が言つた。

そんな時期か…と失念していた自分に呆れる。カレンダーを見やうって大きく溜め息を吐く。

「華月…ごめん」

「沖野にしては珍しいわね。議会放つたらかす程の何があつたの？」

「…人生掛けてでもしなきゃいけない事って死ぬまでに幾つかあるでしょ？その一つが巡って来ちゃって」

「へえ、カッコいい」

「無惨にカッコわるい結果を生んじやつただけだね。なかなか上手くないんだよな」

「人生簡単だつたらツマらないじゃない？上手くないくらいが丁度良いわよ」

そんな事を言える華月が一番カッコいいと思う。この同輩をとても尊敬出来るのはこういう考え方だ。都が懐いているのも尚哉が邪険に扱わないのもよく分かる。

トントンと扉を叩く音がしてカチャリと開かれた。

その瞬間、心臓ごと驚掴みされたような気持ちになる。

その姿形が『谷口都』そのもので…でも別人だと分かるから。

以前の都に似てるのだ。今の痛い程のオーラが出る前の出会った頃の都と…。

幻かもしれないと思って話し掛けるのをためらった。

「沖野センパイ、私由口京です。議会の書記として配属されました！」

にこつと元気いっぱいにそう自己紹介した。由口…京。人間…？  
違う人？

都よりも少し小さい？都と少し話し方が違う？都より目が落ち着かない？

色々一瞬で比べた。華月が苦笑している。

「私もびつくりしたけど谷口都とは無関係らしいわよ？」

「はいっ！谷口センパイとは縁も言われもありません！他人の空似です！」

由口が華月に続けてそう言い切った。

普通の人間だったころの都にそっくりなんて神はどれだけ自分を弄んでるのだろうか？

「あー……2年の沖野和美です。半年間よろしく」

「よろしく願いまあす」

と脳天気な挨拶が返って来た。

性格は都と言うよりは桜花に近い？この空気の読めなさといい。

「元カノの話し方に似てるでしょお？」

「か、華月っ！？何で知って？」

「別れたんですってね？報告はないの？私も散々振り回されてると思っただけど？」

「こついつの、俺が言い振らすのはどうかと思っただけど」

「まあ、ね。でも都に訊いても教えてくれないんですもの」

「そういう娘じゃないの分かってて訊いてるの？」

「そうねえ。でもオンナノコ同士はまた別なのよ」

こういう時に色っぽく笑うから華月は分らないね。

「あの…沖野センパイは藤井センパイと別れたんですか？」

「なんか悪い？」

キレ気味に言ったら由口はすぐに怯んだ。

都とは違うから…。言い聞かせてるのにいちいち比べて彼女に悪い事してしまっている。

「良かったあ！私沖野センパイに惚れてココまで来たんです。どうやって今カノと別れさせるか悩んでたところだから好都合♪」

「俺が好きな人出来て別れたんだ。だから諦めて下さい」

バツサリ斬り捨てて議会の資料を引っ張り出した。

華月がなるほどねえ、と呟く。由口は膨れっ面で作業台の前に座った。

「先輩の好きな人、谷口都さんデシヨ？無駄じゃないですか？さつきも見掛けたけど飛澤先輩とラブラブだし」

彼女の呟いた言葉には揶揄の響きもあってもう耐えられなかった。華月に言われるならまだしも会ったばかりの人間に…。

「華月、俺しばらくここには来ない。引き継ぎ資料は作っておくよ。女の子同士のがやりやすいだろ？」

「沖野…」

「俺は聖人じゃないから嫌いな人も居るし気持ちも移るし…でも桜花が皮肉が言えるようになったら可愛くない。絶対嫌いだ」

「藤井さんは…あの空気読めない底抜けの無邪気さが良いところね。陥れようなんて一つも考えないだろうし」

「だろ？だから俺…由口さんみたいなのが嫌い。じゃあね！」

あの人の周りはキラキラ輝いていた。

初めて見たのは議会で舞台に立ってる姿。立ち姿が綺麗で見とれた。

教室で愛しそうに何かを見ている姿。だから谷口都が好きだって気付いたんです。

怒らせてしまった。

それでも良いから自分と言う存在を認識して欲しかった。  
自分の部屋のベッドで溜め息吐いて転がる。

「京ちゃん、ちょっとお話があるの。いらっしやっい」

優しい母の声にもイラつきながら今行くと返事した。

私立の名門紅城学園に娘を在籍させてる割に極普通の一般的な家庭の由口家。ちなみに自ら進んであの学校を選んだわけではなかったが今となつては親に感謝だ。あんなに素敵な人に会わせてくれたのだから。

でも毎日ニコニコヘラヘラ有り難うを続けてはいられない。

階下に降りて優しい両親の前に不機嫌に座る。

「なに？」

「京ちゃん、大切な話があるのよ」

「なによ？」

「お父さん……」

母が口ごもって父を見つめた。あ、そう言えば明日は誕生日だ。

「京、君は私達の子供ではない。本当のご両親は別にいる」

「……お父さん？何言ってるの？」

「京……、本当の事なんだ。だが君を育てて来て、本当の両親にも勝る愛情と一緒に育めたと思っている」

「なっ……」

何を勝手な事をつ！そんなの一方通行なら自己満足だ！

喉元まで出て来た言葉を飲み込んで顔を歪めた。そんなことを咀嚼出来るほど大人じゃないって育てて来たアナタ方なら分かるでしょ？

だがそれに対する答えもすぐに与えられる。

「京ちゃん、本当のおうちの方がいずれ迎えに来るわ」

「ええ？」

「あなたは神楽という家の跡取り娘。本当ならそんな争いにも巻き込まれずに済んだはずなのに……」

「何を言ってるの？」

「神楽の現当主は無能力だったから」

母が悔しそうに顔を歪めた。何を言っているのか分からずに惚けていると父が落ち着きなさいと一喝した。

「神楽一族は有名な超能力者を輩出して生計をたててきた一族なんだ。京にはその力が受け継がれている」

御伽話… 夢物語だつてもう少しマシな設定で訪れる。

世の中は地獄が8割。今日体感した。

欲しいものは何ですか？

努力しないで手に入るものを並べても欲しいと思わないのは当たり前だ。

自ら欲しいと思わなければ大切に出来ないのは当たり前だ。

だから自分の手からは何もかもが零れ落ちて行く。何一つ掴めないのではなく、何一つ掴んでいないから。

そんな自分が初めて掴もうと思ったものは、自覚出来た時には他人のモノだった。

ふうーっと長い溜め息を吐くと人の気配が降って来る。

「…由口さん？いらつしゃい。華月はまだ来てないよ」

そう挨拶して席を立ち上がる。今日は自分の荷物を取りに来ただけだから。

私物を紙袋に突っ込むと即座に退室しようとした。

「あ…あのっ！」

由口は必死に荷物にしがみついて引き止める。こういう行為、自分に足りない部分だ。そう感じて少し立ち止まった。

「なあに？」

「この前はすみませんでした。舞い上がってしまった」

目を泳がせて言葉を選ぶ由口にこの前とは違う印象を持つ。何だろうか？一日で三年経ったような成長の仕方。突然彼女は大人になったような雰囲気を持っていた。

何かも『欲しい』だけで済まない事を分かってる。だから言葉でそれを埋めて補う。

「私は本当に沖野センパイの事が…」  
告られる。面倒だ。

思ったので由口の口許に手を当てて黙らせた。

「何にも関係を築いてないのに答えを急くの？」

「あ…っ」

「俺の今の答えはNOだから訊くだけ無駄だ」

「……センパイ、ふるのだって人間関係には必要なプロセスですよ」  
むくれながら言った由口は姿形は都とそっくりでも性格は違うんだな、とようやく本人を見る事が出来た。誰とも比べずに、だ。

こんな風に学生活動に励むだけあって、体育会系の明るい彼女は野に咲くタンポポのようだ。

踏まれても踏まれてもめげない。しかも勝手に増殖していく西洋

タンポポ。

「君はフラレに来たの？」

「いいえ！」

訂正。周りを食い荒らすブラックバス！

「じゃあどうして欲しいの？」

「付き合っただけに決まってるじゃないですか！」

「無理」

「やってみなきゃ分りませんよ」

「食指が動かない」

「そんなハズない！私谷口センパイにそっくりナンデシヨ？」

「顔形で選んだわけじゃないし…明確な理由が必要なら性格。けたたましく言われると萎える。桜花も口は達者だけど俺の前では可愛かった」

「谷口センパイみたいにおとなしい人が好き？」

「都が？おとなしい？」

「都は自分の前でおとなしかったのは少しの間だけだ。」

仲良くなればなるほどに自分に言い返すしケンカになるし、言いたい事言える関係って事なのかもしれないが…なんで都を好きなんだろう？分からなくなりそうなくらい自分の 趣味とかけ離れていて笑えた。

それでも理由を吹き飛ばすくらいの引力。

好きの理由なんてないから説明出来ない。

「…取り敢えず、付き合う言われもないので『ごめんなさい』としか言えない」

「じゃあ答えはまだ要らないです。でも半年時間が欲しいです」

「半年？」

「はい。引き継ぎの半年間でちゃんと私を見て下さい」

「ああ…いいよ」

暇つぶしくらいの軽い気持ちでした返事に由口は顔をクシャクシヤにして微笑んだ。ああ、一生懸命繁殖してるんだな。

ゴキブリ並みの生命力でも当事者はふざけてない。

（自分が絶滅危惧種にでもなった気だったのか？血統書が付いてても何にも意味が無いってそろそろ気付かなきゃいけないのに…）

血統書の大本がそれを放棄したのに周りは躍起になって種の保存を声高らかに唱う。

嫌気がさすと思ってたはずなのに自分もその一人になっていた。

「さっそくですけどセンパイ。私一度ちゃんと谷口都さんに会ってみたいですよ。見掛けたことはあるし、比べられるけど話した事ないので…」

「はあ？ダメに決まってるだろっ！？」

「えー？諦めて欲しいなら実物見せて納得させて下さいよ！」

「むちゃくちゃだっ！」

「分かってますよ。でも諦めて欲しいならそれなりの行動を！」

「勝手に惚れられて勝手に宣戦布告されて…テロリストかよ」

「テロリスト…良いですねい！私の異名にします！Loveテロリスト」

「勘弁してくれ……」

「良いじゃん！私をダシにして会いに行くくらいの根性は必要ですよ。」

「ダシね……」

言いながら都にメールを打った。由口の事、今後の事、相談したいから逢おうって。早い返信。短い文章が帰って来る。

『帰りにうちに寄って下さい』

他人行儀。でも拒絶じゃない文章に携帯を持つ手が熱くなった。

こんな事にも一喜一憂して、どれほど好きでも彼女には伝わらない。チラッと由口を見た。期待の目線。

都から見た自分ってこんな感じかな？ふうーっと先程と同じような溜め息を吐いて行こうか、と彼女に伝えた。

カチャツと携帯を閉じる音が車内に響いた。燃費の悪そうな2シターのスポート仕様のオープンカーが滑るように発車する。マニュアル車で玄人好みに改造されている車には初心者マークが不釣り合いだ。

「あ、尚哉……」

「何？」

「少し急げる？うちに……和美くんが来るから」

「付いてなくて平気？」

「……尚哉はレッスンでしょお？」

「まあ……」

尚哉の住む銀座からマンションのある品川までは空いていれば10分掛からない。道もそんなに混んでいないから和美よりは早く着ける。

尚哉は初心者のマニュアル運転とは思えないスムーズなレバー捌きでトップスピードにのせる。そこまでしろとは言っていないがまあ急ぐ事に異存はなかったので窓の景色に視線を移す。

「私も教習所通おうかな……」

「車はまだ早いだろ？お前16歳じゃん」

「中免か原チャ。尚哉に送ってもらうの悪いし」

「オマエ…相変わらずだな」

溜め息が聞こえてきた。腕が頭の上に降って来てグシャグシャと掻き回す。

「なんでそんなに遠慮がちなん？オマエは俺と何年付き合ってたんだ？」

「一年ちよつとだよ」

「……………ああ、まだそんなものか」

「色々あったもんね」

二人で苦笑した。色々…あり過ぎて何年も一緒にいる錯覚をしてしまう。まだ出会って一年半。まだ付き合って一年。

濃い一年を過ごしたから少し一休みたいものだ。せつかく背負ってるものを軽くして貰ったただの恋人っていう役割に溺れてみたい。

「もう着くよ」

「うん。ねえ尚哉、いつ免許取ったの？」

「外免切替えて取ったから取得自体は16歳んときに海外で」

「……………さすがブルジョア」

「うるさいなあ」

頭を撫でていた手が頬を抓った。

「うるさくないもん！教えてくれない尚哉がヒドい」

「訊かないのは都だろ？俺の事なんか興味ないだろ？」

「……………興味……………って意味では無いかも……………」

「否定しろ！」

拳骨が降って来た。

久々の遠慮がない腕に、殴られていても嬉しくて笑い返す。

そうこうしているうちにゆっくりとマンションの前に車が滑り込み、尚哉は到着を知らせた。

「降らないの？」

「尚哉は……急いでるの？」

「急いでないよ」

「じゃあギリギリまで一緒にいたいなあ……なんて」

そう言うシートがガクツと倒されて尚哉が上に乗っかるように身体を寄せる。

「この車やるにはちよつと狭いんだよな」

「ちょーおつと尚哉っ！別に私そんなつもりじゃないっ……あっ」

口を塞がれるようにキスをした。抵抗しようと挙げた右腕をギュツと握られて効力がなくなる。

暑いのか……熱いのか分からない感じ。

半同棲で今はもう毎日尚哉と会ってるのにまだ足りない。まだ尚哉を感じたい自分が居て……だから結局強くは拒まなかった。

（サーチ……しとけば和美文くん来たって分かる、よね？）

なんて思いながら誘われるがままキスに応じた。

気持ち良くて、心地良くて、ゆっくりと離された唇に今度は自分から飛び込んだ。

浅く嘗めるところから……深く、深く……沈んで行くようなキス。

でもこの人の奥は闇じゃない。深い深い紅。燃えるような炎。

尚哉の腕が伸びて来てスカートの中に触れた。

「濡れてるね」

「好きな人と一緒なんだから仕方ないじゃん」

「する？」

「え……つと……上、行く？」

「そんな時間ないだろ？」

そう言う尚哉の手は本格的に愛撫を始めた。尚哉の手が人避けの結界の印を切ったのも見えただけ……これから来る人はそんなのに遮られる人じゃないって知ってるハズなのに。そう思いながらもよがってしがみついてしまう自分が哀しい。

尚哉の下半身に手を伸ばすと爆発しそうなくらいに熱くて我慢出来なくなつた理由が分かった。

和美に会う事の不安をお互い感じながら消そうとしている。

尚哉のベルトに手を掛けてもうお互い以外に何も見えなくなっていた。

正直言つてちょっと油断していたのだ。

身体の中枢に振動が伝わるまでは本当に尚哉しか見えていなかったのだ。

顔を上げると冷ややかな目線で車を蹴り上げている和美がいた。

「あ…」

「何やってんの？家そこなんだから中でしなよ」

尚哉がそれすら無視してキスを続けた。

「っ…尚哉あ…」

流石に止めようと手を伸ばすと唇が離れていたずらな笑みを浮かべるのが見えた。

そんなだからこっちは夢中になってしまつんだ。

（狡いな…）

衣服を整えながら和美の方をチラッと見た。

髪の毛を掻き揚げた尚哉が和美の蹴った場所を見て溜め息吐くのと同時くらいだ。

「和美、これ外装凹んでるんだけど」

「尚哉お金に困って無いじゃん。ケチケチすんなよ」

「今、結婚資金貯めたいからあんまり無駄遣いしないようにしてるんですが…」

「それなら尚更車壊してあげなきゃね」

「やめてくれ」

どうあつても邪魔する気の本美には勝てないか。

尚哉のベルトを返して車を降りようとしたらまた腕を引っ張られた。

「やっぱり…俺が居たら邪魔なの？」

「尚哉はレスンでしょ！」

「はい。ワカリマシタ。じゃあ夕方連絡ちょうだい」

「うん。いつてらっしゃあい」

独特のエンジン音を唸らせてマンションから滑り出した。

さて問題の和美…と後ろの少女だ。

都の部屋は相変わらず独特の雰囲気がある。メゾネットタイプで最上階だから自然光が上から降って来るように設計されていて、中央のピアノに降り注ぐ光は天然のスポットライトだ。

「都…なんか…」

それ以外の異常を見つけて顔をしかめた。

「あ、私物はもうこっちに無いからね」

「どういうこと？」

「んー…ちゃんと尚哉と住もうと思って。だって私もう蔵守じゃないからここに居られないし」

そう言うとは由口にソファを勧めた。

「ごめんなさいね。もうおもてなしの道具は運んじやったから缶コーヒーかペットボトルお茶しか無いんだけどどっちが良いかしら？」

「あ、じゃあ缶コーヒーで」

由口が控え目に応えた。2本缶コーヒーを振りながら持って来てテーブルに置くと都もソファにつく。

「あ、こんにちわ。初めまして…のようには見えないね！谷口都です」

「初めまして。由口京です」

「和美くんの彼女？」

「彼女候補です」

「あら！あらあらあ」

都が目を輝かせて観察した。そんなに嬉しい？少し腹立たしくて敢えて都の隣りに座る。

「さっきのは飛澤先輩ですよ？仲良いんですね」

「うん♪ダアイスキなんだあ」

「そう、ですか」

簡単に惚気る都に毒を抜かれたらしい由口は間抜けな返事をしてこちらを見た。哀れみに近い視線をこちらに向ける。

「なに？」

「いいえ、沖野センパイに見込みないなら私焦る必要無いですね」

「この人！谷口都さんは俺の婚約者！」

「婚約者？」

更に哀れみの目。そんな関係でも手に入らなかった事が明らかだからだ。

「ユイグチキョウさん、どんな字書くの？京都の京？」

「あ…っ、はい」

「京ってみやこって読むでしょ？名前も似てるのね！オソロい！」

そう言って笑う都は可愛い。年相応の表情。華月と喋ってる時とか… 皇月と喋ってる時とかと同じ顔で、自分の前とは大違い。切なく……虚しくなった。

「あの…沖野センパイ」

「なに？」

「何となく何が好きなのは分かったんですけど見込みは無いですよ…」

「……俺が君の事を好きになる確率と同じくらいにね」

「あっ！ゼロじゃなくなつた！わあい♪」

「限り無くゼロに近いよ！」

「じゃあセンパイも諦めましょ？」

「なっ！…！」

「0・1%でもゼロじゃないですよ！絶対じゃないですよ！これだけで来た甲斐ありました！」

「揚げ足取りに来たのかよ」

「うゝん…言質は取りに来ましたよお？あと谷口都さんがちゃんと飛澤センパイしか見えてないみたいだから良かったです」

スッキリした笑いを由口は浮かべる。まあ納得いつてくれて良かったのだが…。

「じゃあ帰ります。センパイは話があるんですけどっけ？これ以上邪魔して嫌われたくないんでじゃあまた明日！」

チャツと手を挙げて都にご馳走さまデシタ！と言いながら玄関に向かう由口は潔くて嫌いじゃなかった。

少し微笑んでサービスしよう。

「由口！」

「はい」

「またね」

「…はいっ！」

帰って行く後ろ姿はまるで犬が尻尾振ってるようだ。

そう、ああいうカンジの娘は嫌いじゃない。

（空気重っ！）

京が帰ったあとは沈黙だけが残った。今の和美と話すのは疲弊する。昔は和美とする他愛もない会話が好きだったのにいつからこんなになった？

あの日に封印を解いてからだと思うと泣き叫んで前世の『都』を責めたくなる。

どうしようもないことも分かってる。

この和美は封印を解く前、記憶を戻す前から存在していた。むしろ今まで上っ面を守っていた温厚な性格が前世の影響で、前世を自覚してしまったから本質がむき出しになってしまったのだろう。

でも長く一緒にいた和美が虚像だったと思うとやるせない。全く知らない人だったらこういう性格なんだって納得して付き合えたかもしれないが…。

黙っていても埒は開かない。譲歩して和美に言った。

「和美くん…話って？時間掛かる？もし尚哉混ざっても良い話しながらご飯食べながらにしない？」

「え？」

「ここ、何も無いから……尚哉んちに買い物して移動しよ？ご飯作

るから」

「そうだね。もう夕方過ぎか」

差し込む日差しが移りつつあるのを見上げると目を細めて微笑んだ。

和美のそう言う穏やかな部分がああ攻撃的なところに繋がらないの。涙がジワツと滲んだ。

自分が知ってる和美が誠意を込めて『好きだ』と言ってくれたなら、同じお断りはしても嬉しいって言えた。でもこの和美からの愛情ははつきりと迷惑だ。

そしてこの差別は相手に失礼なことも分かつてる。

温厚な和美の愛なら邪険にしても受け止めてくれるから……。勝手に自分にも嫌気がさす。

思いを知ってか知らずか、自分の手を取って微笑んだ和美の表情は昔と全く変わらない。

「何作ってくれるの？」

「あ……何が良いかな？昨日パスタだったから私は和食が良いかなあ？」

「和食？」

「何か食べたいものある？」

「和食……って食べたいモノ考えるの難しいよね。魚？煮物？なんだろう？青年に訊く食事ジャンルじゃないな」

和美は学生カバンを手に取ると首を傾げながら言った。ハンドバッグを掴み和美と昔みたいに手を繋いで歩こう。

何にも考えていなかった時みたいに横に並べば大丈夫かもしれない。いいし。

「あつ！ねー和美くん、カレーとか良くない？」

「いきなり和じゃなくなつたよね？俺は良いけどさ」

「カレー丼なら和だよ！」

「じゃあカレーにする？簡単だし」

赦すように微笑む和美なら安心出来た。それってワガママなんだ

ろうな。

「シーフードカレーにしよっかな？魚介類って和美味くんは食べれたよね？」

「うん。あ、向こうにミキサーってあるんならラッシーも作ろうよ」

「わあ！作る」

品川駅から山手線に乗って、有楽町で乗換えて二駅。

距離的には近いけど面倒な位置関係の尚哉のマンションはこれから自分の家になる。

すでに勝手知ったる家だったから戸惑うことはない。すでに渡さ  
れてる合鍵がいつも以上にくすぐったいくらいで…。

「可愛いキーリングだね」

「あ…っ、うん」

尚哉のくれたルビーの屑石が填ったキーリングを弄ってたらそう  
言われた。

尚哉がプレゼントしてくれたの、

って、昔なら迷わず答えてたな。

色々何も考えていない自分の発言が周りを傷つけてきたのだろう。  
最近、常々自分の愚かさを知る。脳天気は悪だっと思って知らされる。  
「都、ほら行こう？スーパーの場所案内してくれないと俺は分から  
ないよ。地元じゃないんだから」

手を差し延べて笑うこの和美は、穏やかすぎて気味が悪い。

この人の中は間違なく深淵の闇が存在してるから。はつきりと責  
め立ててくれた方が良かった。

いつだったか…前もこうやってカレーとラッシーをみんなで作っ  
たっけ…。

尚哉と遙佳…皐月とで賑やかに食事してから一年経っていない。

もう二度と揃わないメンバー。

ほどなくして鍵が開く音がして尚哉が帰って来た。あの時と同じ  
優しい笑顔で楽譜を降ろしてこちらに向かってくるんだ。

「和美…誰に断って都泣かしてんだよ」

「俺のせいじゃないって。玉葱…はもう切り終わってるし」

尚哉が近寄ってきて涙をほとほと零す自分に口付けた。舌をゆっくり絡ませて快感が身体を支配していく。

少し落ち着いて、尚哉の胸に抱かれて呟いた。

「臯月に逢いたい…」

「浮気者」

「逢いたいよお」

浮気とかそんなのじゃない事は尚哉も知っている。淡い恋心くらいはきつとずっと存在していた。でもそんなじゃなく、彼はずっとずっと本当の意味で自分の親友だったから。

尚哉はギュツとただ抱き締めてくれていた。

和美の材料を切る等間隔の音が心地良く響いた。

ここに敵はいない。そして失った人々ももう戻らない。分かってる…。

フライパンに油を引いて材料を手際良く炒め始めた和美がふと口を開いた。

「戦争に、さ」

「え？」

「行った兵隊が帰って来ると都みたいな症状を起こすらしいよ」

「兵隊って…そんな…」

「自分を責めて…追い詰めて…俺からしたらどこまで自分に酔ってるのかなあって」

「和美…？」

「人生なんて選択出来るのは本人だけだ。奈月も臯月どこの選択肢かで間違ってしまったんだよ。でもそれを選んだのは当人で、それを否定して…例えば生き返せたら…」

ニコツと無邪気に笑って和美は言う。

「人間は無力だね。死ぬ事も自分で選ばせて貰えない。神様の都合で生かされてまるでこの世は都の箱庭だ」

「私……」

「都の、その選択だって都の人生なのは真理だから、神様は難しいね」

「和美！あなたの言いたい事はそれ？」

「違うよ。ウジウジしてウザかったからよつと苛めただけ」

「そんだけ意地悪してどの口で私を好きって言うのよ……」

半ば呆れながら言うと、怒るかと思った。それなのに和美は顔をクシャクシャにして破顔した。

珍しい気がして尚哉と二人で固まってしまう。

和美は微笑むことは多いけどそんな笑い方、珍しくて。

「ちゃんと俺が都のこと好きだって認識してるんだね？じゃあ今日はそれで良いよ」

「何度も何度も言いきかせたのは和美でしょ？」

なんかまずい方向に話が向かっている気がして必死に目を反らした。話も反らしたくて必死になってムキになっていく自分が止められなくて……。

「何で私なの？私別に可愛げ無いし、顔だって藤井さんのが可愛いと思うし、がさつだし、我が儘だし」

「それは、本気で訊いてるの？」

「……理由は本当に教えて欲しい」

「可愛いトコいっぱい知ってるよ。ずっと見てきたんだから。だいたい尚哉の腕の中だったのが玉に瑕だな。顔は都以上にきれいな人、逆に紹介して欲しいよ。まだコンプレックス持ってるの？戦ってる時の顔が好きだよ。前を目指してる時の都の顔は横にいる俺だけのものだから尚哉にも見せない」

泣きそうな顔でそう言った。その独占欲は長年共にしてきたパートナーへのもの。親愛を込めたもの。それが愛なのかそれが私には分からなかった。

「私、和美に約束してあげられるものは一つだけなの」

「都、俺は約束なんて要らないよ。見返りも要らないって言ったら

嘘になるけど返ってくるなんて今更期待していない。都を好きでいたい。ここで君を愛していたい。だからせめて……俺から逃げないでください」

「私、ずっと和美と一緒に戦うよ。私の隣は和美だけのものだから。でも戦場での話しなの」

「戦いのパートナーは恋愛対象にはならないって事？そんな決めつけを止めてくれって言いに来たんだよ」

口許を抑えて込み上げる吐き気を必死に止めようとした。和美は分かっている？こんな自分を作っているのはあなたよ。私を戦わせないで……って私の中の私が叫んでいる。

もう、戦いたくありません。

何かを失うくらいなら、何かを得る為に戦う事なんてしません。そしたら今持てる分だけ持って、逃げてしまおう。

「都……？」

そう優しく呼びかける尚哉の腕だけ掴んで、逃げてしまおう。

私、これ以外要らないんだ。

「和美くんがやってることは私を否定してるだけだわ。そんなうちは何も交渉出来ないね。私は戦わない。戦わなければあなたをパートナーにする必要もないもの。神様として何かを選ぶ必要もないもの。私は……人間・谷口都が選ぶのはこの人だけで良い」

逃げるのがいずれ戦う為の道だって、本気で思った。

それを許そうとしない和美も分かっていた。

こんな言い方、卑怯だって事も分かっていたのに……。

言い渡した台詞はもう少し選べば良かった。和美が酷く傷付いた表情でこちらを見つめて罪悪感はいびり付くように残る。

「都、たとえば……」

「え？」

「たとえば俺たちが、何もかも無かったことにして……」

「そんなの有り得ないっ！」

「零から初めても、それでも尚哉のことを好きになるのかな？皐月

の事を好きだと言ったその口で、九希を愛していると叫んだその心で……間違わずに尚哉を選べるの？それとも気が多い都様はイイ男なら全部喰っちゃうのかな？サイテーだな」

「私はっ！」

なんと言おうと過去は変わらない。皐月に惹かれてたのも事実で、九希を愛したのも事実で、和美は口にするのすら嫌なのだろうが琥雷と寝たのも事実だ。それが例え自分の意志で選んだ道でなくとも……この身体が、心が、私が拒否しなかったんだ。

「私は……和美に間違えたくないんだよ」

不安で口許を抑えながら言葉を選んだ。

私が、私の目で、心で、あなたを相棒として選んだことがそんなに不満なの？私の隣はそんなに嫌なの？

「尚哉と私は多分一緒に戦うことは向いてないと思う。私は、あなたを選ばなかったんじゃない、あなたを選んだの！和美が一生のパートナーだって！」

「誰がそんなものになりたいんだよっ！一生戦場に居ろってことかよっ！俺はアンタを愛してるんだよっ！ずっと！ずっと！ずっとだ！俺の言い分を丸無視すんなよ……」

「和美……」

涙が溢れてきた。きっとこの人は何を言っても諦めない。意固地になってくだけ。

関係と一緒に平行線なんだ。

「和美……」

「都、一回で良いんだ。チャンスを頂戴？」

「え？」

「都が、それでも俺を選ばなかったらその時は諦める。だからチャンスを」

「なあに？」

「都の中から、尚哉の記憶を消してよ。消して、一から……それでも尚哉を選ぶなら俺は諦めるよ」

その歪んだ提案にゾツとした。

尚哉も自分の前に出てそんなの許さないとばかりに睨み付ける。

和美が言っていることは有り得てはならないことだ。

否が応でも………と。彼は自分達の返事を聞くまでもなく「全て、リセットするよ」って。

彼が笑ったのを………見たような気がした。

## 後始末（後書き）

しかし弱い神様だなあと思うのです。

でも都ちゃんを書くときに意識しているのは普通の女子高生が突然全知全能になったら……。

「もうやだ！」って投げ出すか投げ出さないかのギリギリの所に彼女は立ってます。

唯一のモノはあんまり長くする予定が無いので、和美君もあんまり気張らないで頂きたい。素直にスクスク成長してね！

> i 1 8 0 6 7 — 2 4 3 8 <

由口京・沖野和美

## モノクローム（前書き）

ブラック和美。ついに降臨です。

昔から実は腹黒って言い続けてきたけどここまでは……………。

そして尚哉が案外ヘタレで困ります。

二の足踏んでる場合じゃ無いぞ！

## モノクローム

暗い…………と。

そう感じたのは何故だったか？

朝陽は自分を煌々と照らしているのに。

「都、おはよう」

「…………あ、おはよう。和美」

「ぼーっとして、どうした？」

「なんか立ちくらみかな？目の前が暗く感じる」

「それはそれは…………保健室行き決定ですね」

呆れるような笑いも彼の優しい雰囲気では厭味に感じない。そうね、保健室。とすんなり納得した。

いつの間に学校に着いたのだろうか？どうやってここまで来たのか記憶がない。

「ほら、手」

「え？」

「倒れたらダメでしょ？それとも抱っこしてあげようか？」

と冗談を言う彼だがくすぐったいぐらいのお姫様扱いは少しの優越感も感じる。

綺麗な顔立ち、美しい所作、温厚な性格、過剰なエスコート。できる男だなあ…………。

きつとモテるのだろう。こんな人を好きにならない女子はいない。

「和美くん、なんか頭スッキリしてきたからもう大丈夫だよ」

「顔色悪いし、ダメ。今日は保健室に登校」

「出席日数…………」

「もともとサボり過ぎなんだよ。もう少し学校来て俺とちゃんと学生生活営もうよ」

苦笑するように笑った顔がすごく綺麗で見惚れてしまった。

ふらふらと近寄って確かめるように彼に触れる。

「な、なに？」

「消えちゃいそうだったから」

「消えないし。俺人間だし、生ものだし」

「生モノ？」

「焼かれちゃいないでしょ？」

「確かに、あは」

なんだか安心して笑みがこぼれた。そっか……………なんかずっと緊張していた気がして、ようやく気を抜ける。和美の前でこんなに気を張っている方が可笑しいってようやく思えた。

でもそんな自分を見て、今度は和美の方がぎこちなく固まる。

「和美？」

「あ……………都……………俺お腹減ったみたい」

「何それ？じゃあ何か食べて帰ろ！」

「うん」

うまく誤魔化せた、って安堵するように笑うのは……………なんで？不快感が拭えないまま彼の手を取った。

運河沿いに聳え立つ高級マンションの一室は一人で住むのは寂しすぎて、和美が送ってくれた後は入るのが嫌な気持ち湧き上がる。和美に上がっていく？なんて訊けないし。だからと言ってその背中に抱きついて和美の家に行きたいなんて口が裂けても言えないし。（和美くん忙しそうだしな……………）

後ろか姿が見えなくなるまで手を振って渋谷マンションの中に入った。

（あれ？）

何かすごく久々な気がするエントランス。ずっと住んでるのにデジャヴなのかな？

ポケットから鍵を取り出すと自分のキーリングに違和感を覚えた。（こんな綺麗なのいつ買ったっけ？）

赤い石の填ったキーリング。綺麗だけど自分のモノではないよう

な違和感。でも鍵は…………。

（あれ？）

やっぱり自分ではないのかもしれない。キョロキョロと周りを見渡した。でも自分はこれしか持っていない。でもキーリングに鍵が二つ付いているのだ。一つはこのマンシヨンのもの。もう一つは……………分らない。ここで迷っていても仕方ないのでオートロックを解除して中に入ってしまった。

「え？」

鍵を開けて更なる驚愕の声を漏らした。一切の生活用品が段ボールに詰められている。

何の嫌がらせか、ご丁寧に伝票まで張られたモノもあった。送り先は二件。実家・京都と……………見覚えのない銀座の住所。

何が何だか分からなくなりながらも、まだここから出て行く気のない自分は途方に暮れながらも段ボールを開梱した。

程なく玄関のチャイムが鳴ってインターホンの画面を覗いた。エントランスではなく、ここの玄関からだった。

首を傾げながら扉を開けるとそれはまさに理想、が服着て立っていた。

物音はしてたから引越しがあつたのは分かっていた。しかもここは一族所有のマンシヨンだ。入ってくるのは地方から兄、九希が召集した人間が主だろう。

だから引越しの挨拶に来るなんて思ってもみなかったし…いや、当主の継妹だと知っているならそうとうあざとい。

ただ、この人の顔！

しばらく影を潜めてた美形ハンターの血が騒ぐ。

（顔ちっちゃい！手足長い！）

見惚れて下から上まで視線が何度か往復した。

彼の口が動いて何か伝えたように見えたが集中し過ぎて全く聞いてなかった。

多分…恐らくは5分くらい彼の姿に心も視線も奪われていた。

さすがに苛立ったように、覗き込まれて正気にかえる始末。

「あ、すみません。谷口都です」

彼の手から受け取ったのは東京銘菓ひよこの包みだった。

（あれ？地方出身者じゃないのかな？）

首を傾げながらそれを見つめる。

「甘いの、嫌いですか？」

悪びれず彼は尋ねた。まるで自分の答えを知ってるかのように不思議だった。だが気負わずに答えた。

「好きです！ありがとうございます」

「それは…良かった」

「何かわからない事があったらいつでもきいてください。ゴミの日とか分かりますか？」

「うん。ありがとうございます。じゃあ一つ、お願いがあるんだ」

「はい？」

なんか話しの流れ上なかなか断りづらいような方向に持って行かれた気がする。

だが彼にニコツと微笑まれば邪推も消える。

「ここら辺はどこで買い物ができる？スーパーとか…」

「あ、えー…とちよつと離れてて…遠いんですけど一番近いのは運河の反対側に…」

「駅の方じゃないのか…。ちよつとわかりにくいな」

「あ、地図持つてきます」

「案内してよ！都ちゃんの買い物に行くときに一緒に連れてってくれる？」

「あ…はい。あ、じゃあ今から」

「ありがとうございます」

何を素直に返事してるんだか…。会って数分の正体不明の男性と出掛ける約束を挟込まれてしまった。

全く、自分のガードの緩さにはガッカリします。

多分名乗って貰ったんだろうけど、すっかり聞き漏らして聞き返

すタイミングはとうに失った。

仕方ないからひよこを置く代わりに財布を握ってもう一度玄関に出ると隣人は待ってましたとばかりに笑い掛けてきた。多分普通の男の人が初対面でこんな事を頼んだところで気持ち悪いだけだがこの人がやると悪い気はしない。

「車出すから」

「はい」

あ、この人年上なんだな。二十歳くらいに見える落ち着いた物腰は同年代の男子とは違う。和美だつて落ち着いてるけど別格の育ちの良さみたいなのを感じるんだ。

まるで王族のようなオーラというか…。うちの兄に近いのを。

「あの、お引越しはなんで？」

「うちのマンションが工事に入るから仮住まいで。ちよつとの間だけだよ」

「あ、じゃあ東京の人なんですね？」

「うん。都ちゃんとは京都でしょ？ご実家に寄らせて貰ったことあるよ」

「本当？私居たときかなあ？」

「居たときだったよ」

つてまた寂しそうにニコツと。

そうだ。この人自分を見ながらずっと寂しそうに笑うんだ。わけが分からず首を傾げた。

多分初対面なのに無視できないような既視感。

どうしようもなく胸が疼く。本当は彼に触れたくて仕方なくて。

（なんか私…イヤラシイ）

冷静に考えれば初対面の男の人に触れたいなんてちよつとナイ。でも一目惚れのようなものかもしれないな。

この人をずっと見ていたい自分が居るんだ。

駐車場に停まってるツーシーターの車に乗り込むと『女の痕跡』をいっぱい見つけてそんな淡い恋心は封印した。

「右に出てください」

シートベルトを締めて、なるべくシートの位置とか動かさないようにちょこんとすわる。

腰当てのところに用意された女性物のブランケットは可愛いデザインで少し良い臭いがした。ルームフレグランスはオレンジで隣人さんの雰囲気とは少し違う。きっと彼女の趣味だ。

シートの後ろにスコアブックとバイオリンケースが見えた。バイオリン弾かれるんですか？…って声が出ない。なんかシヨックで。

「都ちゃん、運河は渡るの？」

「この橋じゃなく次の橋から。そこからのが車で入りやすいです」

「一通なんだ？都ちゃんは車で行くの？」

「私免許持ってますよ。まだ16歳です」

「だれかに連れてってもらったのかと思ったから。ナビ上手だね」

「え？…誰かと…前に車で来たことあったんです」

「そう」

誰だっけ？

なんか記憶が抜けてる気がする。ぼーっとしてるのかな？しつかりしなくては。

滑り込むように車は大型スーパーの駐車場に入っていた。

「へえ…大きなところがあるんだな。便利」

そう呟いて自然な様子で手を差し延べられた。操られたようにその手を握っている自分がいて…。

「すみません…あ、あのっ！」

「ふはっ！」

吹き出すように笑われた。そりゃあそうだ。謝ってるのに手はしっかりと握ってしまってるのだ。

「なんか初々しいなあ」

「え？図々しいの間違いじゃ…」

「なんで？俺が手を出したのに」

「なんか…彼女さんに悪いというか…彼女さんが羨ましいです」

「そー？でも今、俺彼女いないけど。この間フラれちゃったしな」  
生唾飲んでしまった。

もつ目も当てられない。プライベートに踏み込みすぎてしまってる。

「そんな顔するなよ。だから人恋しいのかな？たまに遊んで？」

と彼はまた美しく微笑んだ。

その手は…握ったままに。

初々しい…。

付き合いはじめの都はあんな感じだった。慣れを取るとああなるんだな」と。

遠慮がちなのも可愛らしいが、でも自分に遠慮しないで抱き着く都を愛してるんだ。

だからどうしても和美の思惑通りには進めさせない。

しかし…。

都は本当に自分の顔が好きなんだな。

701号室のチャイムを鳴らすと先ほどより元気よく扉が開かれた。警戒心が少し失せた証拠かな。

「都ちゃん」

「どうしたんですか？」

「さっき買物付き合って貰ったからご飯ご馳走しようかと。食べに来ない？もう作っちゃった？」

「まだですけど…でも悪いので」

「一人じゃ食べ切れない量を作っちゃったよ」

って言えば彼女は来る。

ニコツて笑って恐る恐る部屋から出てきた。

「じゃあご相伴に上がります。今晚のメニューはナンデス力？」

「パスタとクラムチャウダーとサラダ」

「この短時間にそんな作ったんですか？」

「都ちゃん、俺そんなに年上に見える？」

「え？」

「なかなか敬語が崩れないから」

「でも年上ですよね？」

「まあ免許あるし。でもデカデカと貼られた初心者マーク見えなかった？俺、まだ高校生だし」

「あ…ソウナンデスか？」

「ソウナンダ、って言うてご覧？」

「…ソウナンダ」

「よろしい」

満足して笑うと都は非常に言いにくそうに言ってきた。

「大変失礼なんですけど…」

「ん？」

「私、アナタの名前を聞き逃してしまったんです。なんてお呼びすれば良いですか？」

「…尚哉」

「尚哉さん？」

「尚哉って呼び付けて？」

「尚哉？」

ヨシっ！と都の頭を撫でたら顔を赤らめた。

彼女が部屋に入ってきて、少し身体を強張らせたのが分かる。

それは当然だろう。

都は一度もこっちの部屋に入ったこと無かっただろうし。

かなり広めの1LDK。システムキッチンとソファークセットの奥にはベッドが見えている。都と一緒に使っていたものをわざわざ持つてきたのだ。

「ああ、ごめん。扉締めてなかったな」

「いえ…」

「敬語も禁止！俺ら別にへつらう仲でも無いし」

都は嬉しそうに微笑んだ。

和美との約束通り、根本的には変わっていないのだ。

都を座らせるとタラコパスタとクラムチャウダーと和風サラダをテーブルに並べる。

「よく引つ越したばかりでこんなに…むしろうちに食べに来てくれないでも良かったのに」

「ん？じゃあ今度は都ちゃんちに呼んで？」

「もちろん！…あの、私のも呼び付けて下さい。なんか公平じゃないし」

「都…？」

彼女の名前を丁寧に呼んだ。

すぐに反応して顔を隠すようにそむける。

「食べよ？」

「あ、じゃあ、いただきます」

「召し上がれ」

と奨めた。

少しでも覚えてるだろうか？そのメニューは最初の夜に作った物だ。

あの時はそれどころでは無かっただろうけど。

「口に合えば良いけど」

「すごい美味しい！今度教えて下さい！」

「下さい？」

「教えて、？」

「良いよ？じゃあ一緒に作ろう。明日とかは？」

「じゃあ明日！今度はうちに来て下さい」

「うん。じゃあ明日」

焦りは禁物だっけとずっと唱えつづけていた。

気を抜いたら隣の部屋に引きずり込んでしまいそうになるから。

今年から転科した音楽科の教室にはまだまだ知り合いがいなくて少し寂しい。

っていうかこの教室内は一般クラスには無い殺伐とした空気が流

れている気がする。

全員ライバル…みたいな。カリキュラムも人それぞれだからあんまり友達友達した人も少ない。

（ユウちゃん…寂しいよ）

と、親友・裕子の顔を思い浮かべながら一般クラスの方を見つめた。元の自分のクラスが見える。窓際でボーツとしてる和美の姿。

（あ…休み時間に遊びに行っても良いかなあ）

と見つめていたら、和美が気づいてこちらに微笑んだ。

小さく手を振ると更に嬉しそうにする美しい友人。

相変わらず可愛い。外見は最初よりもずっと男らしくカッコヨクなったけど中身の可愛らしさは変わらない。

美形ハンター的にも満足させて貰えて、性格的にも一緒に過ごしやすいステキな友人です。

我慢出来なくてチャイムが鳴ると同時に古巣に向かった。

朱の制服は紺色の制服に混ざることなく浮いてしまうが、彼等はてらいもなく受け入れてくれるはずだ。

進学クラスの教室を覗き込むと和美は嬉しそうに手を振ってくれた。裕子は…。

「ユウちゃん！…と」

裕子の側には自分に似た…少女が立っていた。

なんか…。なんだか…こっちの居場所が…。

少女は会釈してすぐに場所を譲ってくれる。少しホッとした。

「あの…お邪魔した？」

「みやちゃん、何を言ってるの？後輩が議会のことで質問に来てただけよ。どうしたの？」

「お昼、一緒に食べよ！」

「良いよ。議長室で食べても良い？」

「もしかして忙しい？忙しい？」

「忙しいからみやちゃんも手伝ってくれてくれるでしょ？書類を留めるだけだから、ね？」

「うん！」

少し大人っぽい友人は優雅に荷物を取り出して、後ろの和美にも声を掛けた。

「沖野も行くでしょ？」

「はい。逆らいません」

副議長（祐子）に頭の上がない議長（和美）。上下関係が見て取れて面白かった。

教室を出ると先ほどの後輩ちゃんが様子を伺うように立っていた。裕子が首を傾げてきいた。

「由口、なんかまだ用？」

「私も議会の人間ですからお手伝いしようかと思ひまして」

「有り難いけど…今日はみやちゃん居るから」

「早く終わらしてゆつくりしましょう」

と、ニツコリ微笑んで強引に押し切ってきた。

和美が嫌そうな顔をしたのも…なんかあったのかな？

「あの…」

「みやちゃんは気にしないで良いわよ」

「ユウちゃんでも私が部外者だから戻るね」

って告げてその場を去ろうとした。

後ろから腕を捕まれるまで。

「な？え？和美？」

「良いから行くよ。寂しいくせに強がるな！」

「っ…」

昔からこの人は自分のそういう心に敏感なんだ。腕を捕まれてる部分が少し熱く感じた。

「由口も、来たければ来れば？」

冷たい和美の言い方に傷付いた顔をした。瞬間的に和美じゃなく自分のほうに何か言いかけた。

一瞬だけ黒い渦のようなものが彼女の身体を包み込む。見間違いかと思うくらいの一瞬。そのあとは彼女は自分に敵意を剥くことは

無かった。気味が悪いくらいに…。

そして自分は見間違いにできるほど利己的にはできていなかった。

深刻そうな顔をした都はご飯を口にしながらもずっと何かを考えていた。こういう時は昔から何を言っても無駄だったが……。

（今はその無駄だって無理矢理こじ開けなきゃいけないんだな）

ふーっと溜息を吐くと都がハツと我に返った。

一応失礼だという概念はあるらしい。

作ってくれたパエリアも美味いしこちらとしては全く文句は無いけど。でもやはり少しは触れたいんだ。直接触れないんだから近況ぐらいは話したい。

「なんかあった？」

「え？なんかあたら顔してますか？」

「してる。考え事。俺、今日はもう帰っておこうか？」

「あ、いや……頭の整理付けたいんです。相談に……のつてくれませんか？」

「都が敬語やめたら、いいよ」

「う………なんか尚哉って大人っぽいから」

昔は自分で勝手にタメ口きいて、呼びつけにして笑ってたのに変われば変わるもんだ。と、いうか自分のが変わってしまったからなのかも知れない。もう一度小さく溜息吐いて都の頭を撫でると仕方なく許可した。

「良いよ、悩み事話してごらん？オニイサンがきいてあげよう」

「あははっ！オニイサン？」

「可笑しい？一応年上だし」

「可笑しくない。なんか嬉しい」

ってわらった都の笑顔を見て『しまったっ！』とすごく後悔した。そんなポジションが欲しかったわけではない。ちよっと卑怯な手段だが強引にそのまま彼女の頬に手を回した。

「尚哉？」

「話してみなよ？」

「あのね！」

と、多分無意識ではあると思うのだが……………簡単にその手を片付けられてしまった。

心の中ではいきり立っていたが平静を装って都の話を聞く。昔から感じてはいたが、この二ブチン娘は自分が落とすのに一番苦労するタイプだ。どんなのでもある程度の美形なら好きだという自覚がなまじあるせいでそれを恋と錯覚したりしない。ついでにどんなにフェロモン振りまいたところで自分の事を好きだと思うヤツは居ないと思い込んでいるからあっさり切り返してくる。少しは照れる！

「無関係の人に能力を振るうのは駄目よね？」

「は？」

「たとえば……………ちよつとケンカ売られそうになったからって回避するのに相手に暗示かけるとか……………駄目よね？」

今、お前がまさにその状態だけど……………。とは言えずに。

「能力者が一般の人に危害は加えてはならないと思うよ。でもその力を使って相手に害がないなら良いんじゃないか？実際人除けの結界とかだって無意識に一般の人の行きたい新路を妨害してるし他にも影響を及ぼしていないとは俺には言い切れないし」

「でも！」

「何があつたの？」

「……………なんでも」

「そこまで溜めておいて？色々あるって言ってるようなもんだし」

「じゃあ……………たとえ話で聞いて下さい」

「うん」

って言つたつて、彼女の話す内容は和美のこと以外にはあり得ない。今、周りにいる能力者はアイツだけだ。

都は少し置いてからちよこちよこ話し始めた。

「私の目の前である人が力を使ったの」

「うん」

「でもその力は一般のごく普通の人で……なんかよく分からないけど私を敵視してたみたい。多分をそこで揉めるのを回避するために仲の良い男の子がその子の記憶を書き換えた……そう！書き換えたみたいなカンジ。一瞬黒い影がその子を覆ってね、それが消えたら敵意とか全て一緒に抜き取られてた」

「ふーん……逆なら嫌だけど敵意を抜かれたんなら都是感謝するんじゃないんだ？」

「え？……だって自分の思ってることを曲げられたら嫌でしょ？」  
真つ当。豪腕直球型。

忘れていたがこういうヤツだった。

それは正義なのか、悪なのか、自分の中の仕分けがある。だから自分の中のグレイゾーンが見過ごせないんだろう。少し苦笑すると彼女はバカにされたのかと勘違いしてむくれた。

「いや、良いんじゃない？違うな、悪くないんじゃない？都がそのコと折りが合わないならいずれそれがいけないときにケンカするでしょ。それも今回の分も溜め込んだスッゲーケンカ！」

「んあーっ！他人事だと思ってるでしょ！私ね、笑わないでね」

「うん」

「って、もう笑ってるじゃん」

「いやあなんかムキになっちゃって可愛いなあって」

「もう！」

「なに？」

「どうしても苦手なんだ。女の子同士のいざこざとかが……」

「いざこざ？」

「男の子が絡むと本当に駄目。ちょっと好きぐらいの意識ならすぐに封印しちゃう」

「つまり？その仲の良い男の子の事が好きな女の子にケンカ売られた」

「うん。多分」

「その男の子はさ、自分のせいでいざこざに巻き込みたくなかったんだろ？そりゃあ裏技だけど、回避したんだから褒めてあげなよ」

何をフオローしてるのかよく分からなくなった。これが和美と自分の違いだ。自分の時は、都に逃げて欲しくなくて時々奈月にケンを売らせてた。やっぱりそういうことは苦手なんだろう。

「あとね、友達を作るのも苦手なの。だから仲の良い男の子だって私には大事。少ない信頼できる人だもの」

「あれ？それは都の彼氏じゃないの？」

これは否定話法。都自身に言わせることでしつかりとけじめを付けさせる。

「……………違いますよ。私の話は、良いんです」

顔を赤らめて彼女は言った。

思ってた反応と違って少し焦りも出てくるというものだ。

カリキュラム別のレッスンはまだなかなか慣れなくて…というかはやはり教室に馴染めなくていつの間にかバラバラと解散するように自分のレッスン室に向かうクラスメイト達に遅れて教室を出る。

なんでこんなにクラスメイト達と溝があるのか、全然心当たりが無いのだが、元々人付き合いが得意な方では無いのでそれもやむなし。

今まで、裕子や和美や……に囲まれて賑やかに過ごしていた方が異常だった。

ふと、見知らぬ美しい顔の男の子が自分の頭に過ぎった。

誰？

すごく懐かしくて悲しい。

いつの間にか涙が頬を伝っていた。

どうしたって言うのだろうか？幻覚を見て感傷に浸るほど自分は感情豊かでは無いと思っていたのだが…。

何か、忘れてる？

段ボールのこと？

きれいな男の子は？

忘れていることを探して考えると酷く頭が痛くなった。

でもあの男の子はどこかで見たことがあるんだ。誰かに似ている？

「藤、井…さんに」

そういえば藤井桜花の姿を最近見ない。

いつも軽蔑するような目でこちらを睨んでいたからいやがおうでもその存在は無視できなかった。ここ最近気がつかなかったのは転科したせいだけでは済まされない。和美の周りにはいつも引っ付いてたはずなのに…。

あれ？

和美と桜花はいつから付き合って、いつ別れたんだろう？

そして、桜花と自分はどうやって知り合ったのだろうか？

記憶喪失とか、笑い話ではないぐらいにすっかり忘れている。

血の気が引いた。気味が悪い…のもあるが、これが誰か第三者による干渉だと言うのなら、これからも忘れていく。いや…記憶を失っていくのだ。

和美に相談しようと思いついて……。

生唾を飲み込むのと次の授業のチャイムが重なった。あの黒い影のことを思い出してしまった。嫌な予感、触れてはいけない何かな気がして和美に訊くことだけは足が竦んだ。

（和美にばれないように調べればいいんだわ。藤井さんのところに行かなきゃ…）

まずは、だ。

失くなっているのは彼女に関する事が主な気がするから。そして自己防衛をした方が良さだろう。

これ以上自分の記憶に干渉されないためにも、護符くらい用意しなければ。

廊下はすでに静まり返っていて、誰もいない。

見回りの教職員に見つからないように気配を消す結界を張った。

和美と裕子の隣のクラス、それが桜花の教室だ。隠れて覗いても

やはり彼女はいない。藤井の屋敷は…なんで行ったのかは覚えていない。でも場所は覚えてる！田園調布だ！

学校から出ると一目散に…いや少し考えて自分のマンション、蔵に向かう。少しでも護りを増やしてから向かった方が良い。

もしかしたら桜花が黒幕の可能性だって拭えない。それに少し寄り道するぐらいのもので…。

息を切らして自分のマンションにたどり着くと黒いきりつとしたスーツで目を引く男性が視界に入った。

ちょうどマンションから出てきた尚哉だ。

「都？学校はどうした？」

携帯を弄りながらどこかに出掛けようとしていた彼は至極まともな問い掛けをした。

少し頭も冷えて、吹き出る汗を拭いながらなんて答えたら良いのかを考える。

「あ、の…急用でサボりました」

「なんで？君は音楽科だろ？練習サボってまでいくような大切な用事？」

ちよつとしたサボりを咎めるものではないぐらいの怒りを彼から感じた。いつもは結構優しい分、突然の責める口調にあわあわしながら言い訳をした。

「私、私が変わで！」

「は？」

「変なんです。さっき気づいて…なんか記憶が無いんです」

「…うん。それは確かなの？」

「わ、ワカリマセン」

「…とりあえず中に入ろう。そっちの部屋に行つていい？」

と、尚哉は少し溜息混じりに腕時計を見遣る。

「あ、用事があるんじゃない？」

「あー、ナイナイ。大した用事じゃない」

「でも」

「ちょっと友人の様子を見に行こうとしてただけ。約束あったわけじゃないから」

「ごめんなさい」

涙が溢れてきそうだった。

尚哉そんな自分を冷ややかな目で見つめた。

あんまりにも凍てつくぐらいの冷ややかさに涙も引つ込む。

（普通女の子にこんな風に冷たくする？するものなの！？）

肩を竦めて怯えながらも彼が促す方向に行かない選択肢は出て来なかった。

兄、九希の名でここに入ってるのだから信頼はできると思うし。

「顔洗って来なよ。お茶煎れとく」

「あ…でも」

「台所の配置ももう分かるから」

「じゃあ…行ってきます」

頭を冷やせ、ということなのだろう。パタパタと洗面台の元へ走った。

尚哉が言った意味を理解した。真っ青だ。でも走ってたせいで頬が赤い。おかしいことになってる顔面に笑いが零れた。

そう、冷静に対処していかないといけないのかもしれないんだ。

私、仲間に何か隠し事されてる……。

記憶が戻りそうなのか？

都の後ろ姿を見つめながら首を捻った。

それとも何か違うような気がするからだ。なんて言えば良いのか

…和美にこれで本当に良いのかを確認したいくらいだ。

都が別人のようだからだ。

怯えたり、泣いたり、昔の都は絶対しなかった表情に、実は騙されてるんじゃないのかとすら思う。

それが時の流れの変化だと言われてしまえばそれまでだ。

（あとは背負ってるモノの重さかな？）

何よりも皐月がない。都の強さの半分はあの心の双子のお陰だったのだろう。

そういえば、ともう一度時計を見遣った。完全にタイミングを逃してしまった。約束の主はご立腹だろう。

だが自分の一番が都だと言つことをよくよく知る主だ。悪いとは思うが次の機会に。

「やっぱり約束あつたんじゃ？」

戻ってきた都は少ししっかりした顔に戻っていた。ああやっぱり本質は『谷口都』なのだ。強い良い女。

「構ってゝって、オーラ出してたクセに？」

「出してません！ちよつと落ち着いたからちゃんと順序だてて動きます。もう、平気！」

「じゃあ順序だてて俺に説明！きつと力になれるから」

強く言ったから反発するかと思つたがカウンター席に座ってペコリと頭を下げた。

上目遣いでこちらを見上げて、

「よろしく願います」  
って。

どうやら覚悟も決めて来たようだ。濃いめで出した夏積みの紅茶を都の前に出すと自分もそちらに回ってカウンターに腰掛けた。

「最近…画像を差し込まれるように男の子の顔を思い出すんです」  
「うん」

俺か？と期待しないわけない。でもいいかげんコイツの空気の読めない性格は分かつてるし…。

だがしかし、次の言葉にイロイロツツコミたい。

「藤井桜花さんって、一族の人なんだけど知ってる？顔があの人に似てるの」

それは、間違いなく俺ではない。

こんなタイミングで皐月がない弊害が生まれてくるなんて和美も夢にも思っていないだろう。自分は和美を恋のライバルにカウン

トしていなかったが、皐月は間違いなくライバルだ。都の心を占めているのは確かに恋心よりも同情心だっただろうが、好きっていう部分は確かにあった。だから都も悩んでいたし、和美は皐月が死んだことで一人心を操作する相手が減ったぐらいにしか考えていないのかも知れない。でも大間違いだ。書き換えの効かない部分が都の中に存在してしまっているのだから。

それで凹んでしまう自分もいるけど。

（俺って都にとって何なんだろう？）

恋人ではあっても、優先順位が皐月に負けてるって事か。

「尚哉？」

「ああ……………ごめん少し考えてた。もし、今から行こうとしているところが桜花の所なら一緒に行くか？」

「え？」

「俺の……………約束は桜花だから」

と……………自分の胸ポケットですーっとバイブし続けている携帯電話を見せて、怒りの着信の嵐を伝えた。

相手はもちろん『藤井桜花』で。

もう呆けることしかできなかった。

尚哉の車のおかげで藤井家は迷わずたどり着けたし、電車を使うよりも圧倒的に早い。門は尚哉の顔パスで開き、慣れた様子で屋敷の地下スペースに当たる駐車場に車を止めた。自分はと言うと、桜花とどういう関係なのか、とかあんまり事情をきけぬままここまで来てしまったのを後悔していた。尚哉は車から降りずにスーツのネクタイをポケットから取り出して締める。彼も気が重そうなのは間違いない。

車に衝撃が走り、後ろを振り返ると黒いワンピースを着た黙つてれば美少女・藤井桜花が車を足蹴にしてこちらに合図を送っていた。

「蹴んなよ」

「ネクタイとかどうでも良いわよ」

「そういうわけにはいかないだろ」

「どうせ父さんはいないわ」

「そうか……一人で大変だな」

尚哉はそう言って車から降りた。慌てて自分も降りて尚哉に着いていく。

桜花は自分を一瞥すると何も言わずに中に通された。歓迎されていないのが伝わってきて逃げ出したくなった。

（記憶……無いのって怖いんだ）

（暗闇みたい）

なんで桜花が自分を嫌っているのか、すらよく分からない。性格の不一致ならばまだ救われる。何か酷いことをしてしまったからだったなら、自分はここに来てはいけなかったのかも知れないのだから。

足が竦む……。

「都」

って声が頭上からして、尚哉が振り向き様に手を差し出していることに気付いた。

グー、パー、と動くその掌は握ることを許可している。

暗闇を導く光のように見えて、その手を取った。

しばらく屋敷を進んで少し開けた部分を抜ける。そのまま二階に上がって桜花は二つの扉の手前側を開けた。

男物で……見覚えのあるジャケット、Ｔシャツが掛かっている。男の子の部屋だと分かる造り。簡素なベッドが置かれていて、机には勉強道具なんて一切置いてない。ミステリー小説がいっぱい積まれている。週刊誌がグラビアページで開かれていたり、本当に本当に……。

息が止まるかと思った。

「藤井さんの部屋じゃ……ないよね？」

「は？」

機嫌が悪そうに、桜花は聞き返した。多分……間違いなく、自

分はここに来てはいけなかったのだ。

それは分かるのに、全く記憶が無いんだって……。  
尚哉が振り返って自分を掴んだ。

「平気か！」

「黒……」

なんで気付かなかった？尚哉のスーツはモノクローム。黒いスーツに黒いネクタイ……。

「や……やだあ、私何を？」

何を忘れてるの？何を？

大事なのに……。本当に大事な部分なのに……。

いつの間にか、自分の肩を掴んで蹲っていた。足下が見える。でも見えてる。

自分の目は……。もう、見えていなかったはずなのに。

いつの間にかちゃんと見えているんだ。

忘れていることは一つではない核心。

そしてこの忘却が自分の為であるような気がして……。

自家中毒のように嗚咽が上ってきて胸許を抑えた。何が起きているのか全く理解できなくてそのまま呼吸がはげしくなった。

息ができなくて頑張って酸素を吸おうとしているのにもっと苦しくなつて、もう死んでしまえばいい……と一瞬。

あの男の子は笑っていた。男の子だと思っていた幻覚が桜花自身と重なる。ゆっくりと無表情に桜花の手が自分の口許を抑えた。彼女の手で窒息させてくれるならばそれも良いかもしれない。気が、済むなら……。

「はあ？バカじゃないの？」

脳天に響くぐらいの大きな声で彼女は言った。その直後バチンと額に衝撃が来る。

「これはただの軽い過呼吸です。少し落ち着きなさいよ」

「あ、の」

「皐月が選んだ道を今更悔やんでも仕方ないわ。でもね、谷口さん

だけはちゃんとしてて。生きる事を放棄しちゃ駄目でしょ？私はア  
ンタなんかを殺してあげないわよ」

桜花の唇は震えていた。本当は罵倒したいのだろう。自分がこん  
なだから……しっかりしていないから。本当は一番凹んでいる人  
に励まされてどうするんだ？

溜めてきた涙が溢れだして、声を上げて泣いた。

思いつきり泣いた。

思い出せなくて、ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

そしたら最初はすすり泣くような音。でもすぐ重なるように桜花  
が泣き始めた。

涙は、枯れるまで出してしまえば良いんだ。自分の明日のために。  
そんな自分達が泣き止むまで尚哉はずっと二人の頭を撫でてくれ  
ていた。

「ああ、それで張り合いがなかったの？」

目を腫らしていても偉そうな藤井桜花は都を一瞥しながら言った。  
記憶が無い相手にも容赦無い。まあ、性格の不一致で仲が悪いの  
だからこれは仕方なし。

「谷口さん、私のことは覚えてるの？」

「うん。でもうる覚え。なんで和美と付き合って和美と別れたのか  
が思い出せなくて……」

「んなもん思い出さなくて良い！」

「えー！」

「それはカズミちゃんに聞いて下さい」

「それができれば苦勞してないです」

こちらはすっかり元気になったようで、皐月の机にあるエログラ  
ビアをぺらぺらめくってキャツとか言ってるし。吹っ切れると強い  
ところも相変わらずだ。

桜花が溜息混じりにこちらに言った。

「少し色々注意してみるわ」

「よろしく頼む」

自分が頭を下げると意外そんな顔をして都に問いかけた。

「谷口さん、尚哉のことは？」

「え？尚哉？……あ、藤井さんと尚哉はどういう関係？」

と脳天気には彼女は尋ねた。桜花は一瞬口を大きく開けたが持ち直して……すぐに全てを悟ってこちらに言った。

「ご愁傷様」

「それはご焼香に来てる俺が言うセリフ！」

「だって大変な相手を敵に回してるでしょう？」

「良いんだよ。それでもちゃんと選ぶ相手は間違わない」  
「都も、自分も。」

桜花はそれを聞いて少し悲しそうに微笑んだ。

「生きてるって良いことだわ。ゼロになってもやり直せる。ねえ、谷口さん。記憶を失っても思い出してくれるぐらいうちの兄貴のことを気にしてくれるのはありがたいんだけどね」

「藤井さんの兄貴？」

「そう。あなたの記憶の男の子は藤井皐月。私の双子の兄よ」

「さ………つき」

「ここは皐月の部屋。谷口さんとは私がいくら止めても仲良くしてたね」

「皐月………なんで私忘れてたの？」

愕然としながら都が呟いた。一つ、記憶は戻ってきた。和美の思惑通りにはいかないんだ。戻るものと確証が得られればいい。

少し感慨に耽っていると、下を向いて頭を抑えようとした都の顔を桜花は驚掴んだ。

「生きることは生きてるうちにしかできないのよ。皐月のために泣いたり何か思うなら、死んでからにしなさい。今、皐月のために祈るのは私の仕事よ、取らないで！」

「………は、ハイ」

「よろしい。じゃあ、ちゃんと帰って、食べて、寝なさい。ちゃん

と生きなさい」

桜花も強くなったモノだな、と。感心した。

色々考えた。

桜花が色々答えてくれたが結局尚哉の事は一つも分からないまま。でもだいたい分かってきた。

車は再びうちのマンションに戻ってきて、やはり慣れた様子で駐車場のゲートを開けて車庫に入れた。

その横顔を何度も見たことがある気がするのだ。

「尚哉、聞いて欲しいんだけど……」

「ん？」

「生きてく上で恋人つてもしかしたらあんまり必要ないのかな？」

「はあ？」

「臯月くんのが先に思い出した」

「お前……思い出して……」

「いや、さっぱり。でもねえ、尚哉コレあなたの？」

鍵を取り出して彼の目の前に見せてみた。あの正体不明の鍵だ。

尚哉は嬉しそうに笑って、首を横に振った。

「それは、お前のだよ」

「じゃあこの鍵が開く扉、教えてくれる？」

「自分で、探しなよ」

「意地悪」

「そつだよ。俺は都に意地悪するのが好きなの」

そう言った尚哉のことがきくと好きなんだ。胸が、どうしようもなく疼く。

手を伸ばしてその端正な顔に触れようとした。ずっと尚哉の身体が手を避けてまじめな顔で問いかけられる。

「都、護符はあんの？」

「え？」

「記憶操作をこれ以上されないために」

「あ、うん。昔九希ちゃんが持たせてくれたやつがあるよ」

「ふーん……じゃあ要らないか？」

「なんかくれるの？」

と少しワクワクしながら尋ねた。

呆れ顔の尚哉だったが自分の耳に手が伸びてきて、尚哉の耳に填っていたルビーのピアスを着けてくれた。

「穴……空いてる。耳……穴……身体に穴が……」

とフロントミラーで茫然自失になりながら確認していると鼻で笑われた。

昔の私！どうしてこの人を好きだったわけ！！

怒りで震えていると耳を再度引っ張られ身体ごと引き摺り寄せられた。何が何だか分からないまま温かくて柔らかい何かか耳に吸い付く。

目を見開いて、頭の中で処理をして。

「うわーん！吸ーわーれーたーっ！」

と照れ隠しに下手な泣き真似しながら車の外に出た。でもすぐにそのピアスに触れてニヤニヤしちゃう自分を抑えられない。

やばいなあ……この性格悪い人、記憶が無くても大好きだわ。

和美は何のぬかりもない。

自分だって、都に直接アイツが悪いんだって喋ってしまいうことができるならば、九希の力を借りて説き伏せてしまいうことだってできたんだ。

でも、和美は自分に一つ約束をさせていた。

いや、脅迫だ。

自分からこのネタバラシをした時には、

「今度は尚哉の記憶を全部戴くよ。都のことを忘れたくないなら、黙って指くわえてみてなよ」

って妖艶に微笑んだ。

何の記憶もなくても、自分と都が出会えばもう一度恋に落ちる自

信があった。

でも、和美が本気で自分と都を会わせないようにしたのならば……。

正直、全ての力を手に入れてしまったあの男を怖いと思う。

掌で転がされてるふりをしていつか都を取り戻したいと思う反面、都さえ諦めればアイツと関わらずに生きていけるんだとすら考えってしまうくらい。

——少し熱くて混ざっていくような感覚。

溶けていくような気持ちよさに震えた。

素肌の感覚がもどかしくて、一つになりたくて身体をすり寄せる。彼の熱い手が自分の髪の毛を掴んだ。

スローモーションで見ているように細切れに、見える画像。頭が沸騰しそうなくらいに熱くて動悸がした。息が上がる、身体が熱い、その美しい指が自分の身体を這うのを期待してしまった。

「な……お」

自分の少し甘い声に驚いて目が醒める。

いつもの自分の部屋は少し殺風景で空調の効いたひんやりした印象を持っていた。自分の吐息だけが熱くて。

夢の中の場所は少し違っていた。品の良い家具が置いてあってホテルみたいなところ。

全部が夢にしては随分と生々しくて……これが記憶の欠片だといふのならば。

（うわぁ……私ってこんなにいやらしいんだわ）

尚哉の意地悪そうに、でも時々すごく優しく笑うあの顔に、欲情しているんだ。

彼が好きなんだ。彼のことを好きだったんだろう。

記憶は確かに戻っていない。でも自分の身体が、心が、求めている。

寝室の壁に手を付いて祈りを込めた。想いが伝われば良い。この、

好きをどうかそのまま伝えて欲しい。

眠りの浅いまま朝はやってきた。都が登校していくのを確認してからゆっくりマンションを出た。

学校に着くと桜花が校門の前で仁王立ちしているのが見えた。目立つところで待ち伏せてくれたもんだ。

「なに？」

「なにって……谷口さんは何で一人で登校してるの？5分前くらいに通ったわよ」

「だってあんまりくつついてるとまた記憶消されちゃうじゃん」

「距離を置いたって解決になってないわよ」

痛いぐらいの正論。正直言っただけからの手に詰まっていたところだ。

自分は記憶を戻してあげるとは都にとって良いことなのか分からない。良い思い出だってあるが、強烈な事実も思い出さなければならぬ。伊織のこと、九希のこと、和美のこと、力のこと。

毎日夢でうなされているのを見てきた自分には判断しづらかった。

「都が全部忘れた方が幸せって言うのは俺も和美に賛成なんだよな」

「はあ？自分勝手なヤツ。谷口都がそう言ったの？」

「いや……」

「じゃあアンタ達の独り善がりじゃないの。谷口都が自分を受け入れてるなら人がどうこう言う事じゃないわ」

ハッキリと桜花は言い切った。

それが彼女の強みだ。

「アンタね、何ニヤニヤ笑ってるのよ」

「桜花、お前何気に昔から都のこと好きだろう？」

「はっ？何を気持ち悪いこと言っちゃってんの？そんなわけ無いでしょ！」

「嫌いじゃないだろう？」

「……ライバルよ、永遠に！」

そう言って校内にそのまま入っていいこうとした。彼女に後について入ると校内で議会議室から出てきた和美と出くわした。

和美は目を大きく見開いてこちらを見ると、議会議室の扉をもう一度開けて自分達に入るように促す。

「学校、来てたんだ？俺はてっきりショックで寝込んでるのかと思ってた」

クスクスと笑う和美には昔のカンジは微塵も残っていない。もともと芝居がかったように可愛い男の子を演じていたから本性は本性なんだろうが……。

「カズミちゃん、人の記憶を奪うのは私は賛成できない」

「桜花ちゃん、これは都のためだよ」

和美の目が吸い込まれるくらい暗く陰った。

桜花もハツと気付いて避けようとするがここは彼のテリトリーなのだ。四角いその部屋全体がまるで結界のように。

壁だった場所が部屋の形だけを表すように線しか残っていない。

桜花が息を呑んだ。

「カズミちゃん……何やってるの？あなたバカじゃないの!!」

「別に……？俺は都さえいれば良いんだ」

「今あなたがやってることは琥雷と同じじゃない!」

「あんな虫けらと一緒にするなんて失礼じゃないか」

「和美!」

桜花が、届かぬ思いを必死に伝えようと呼びかけた。だが和美は変わらない。

「和美、桜花はせめて外に……。俺がいなくなれば十分だろう?」

「尚哉、何言ってるの?尚哉には見て貰わなきゃ。桜花ちゃんには、黙って貰うために少し記憶を消させて戴きます。尚哉は俺と都が結ばれるのをちゃんと見てて?ね?」

「お前……」

と言った瞬間だった。和美の張ったかなり強い結界が脆く崩れた。第三者の介入があったからだ。

ゴクリと生唾を呑み込み、そこに立つのは都だった。

メンツを見てしまったー！っていう顔をしている。どんなときに割り込んでしまったのかは分からなくてもあんまり良いタイミングじゃないことは分かったみたいだ。

でも一瞬目を泳がせた後は流石だ。

ニツコリ邪気無く微笑んで言った。

「和美、ユウちゃんが探してるよ？全体朝礼で和美がいなかったら議長さん誰がやるのさ？」

「あ…………ごめん」

「お取り込み中だった？でもユウちゃんはもっとお取り込み中だから急いで！」

急かすように手を振る都の視線には自分達は全く入っていない。きつと彼女も悟ったのだろう。自分達に何か言おうものならまた記憶を改ざんされてしまう。それはもう御免だ、と。

和美は優しく微笑んで、その都に答えた。

「大丈夫だよ、華月はああ見えて表舞台大好きだから」

「女の子一人に押しつけは良くないよ」

「今行く。もう済んだから」

そう言ってこちらを振り返った。

「尚哉、逆らうなよ」

扉がパタンと閉まり、大きく息を吐いた。都が記憶を失う前にやはりオーラが怖いつて言っただが、こういうことなのだろう。蛇に睨まれた蛙とでも言うのか、対抗手段が見つからない。精神攻撃とが自分の専門外すぎてどうして良いかが全然分からないんだ。

都が扉を開けて結界を破ったのが不思議なくらいだ。ただの結界士に成り下がったが、あいつのその力は本物だと言うことなのだろう。

気を張って疲弊する。

「桜花…………もう一人で和美に会うなよ」

と隣りに立つ彼女に言い聞かせるように言った。だが返事は返っ

てこない。少し苛つきながら顔を覗くと目の焦点が合っていないかった。

「おい！」

「何をするの？やめてください」

固い喋り方で手を払われる。和美は既に桜花の記憶の改ざんを済ませていたのだ。何事もなかったように無表情のまま部屋を出て行く桜花に……何もしてやれなかった。

## モノクローム（後書き）

1・後始末の部分はかなり前からずっと放置していた話で、この章を書くのに随分と溜め込んでしまいました。理由は分かるだろうけど和美の黒さ。そして悪魔のような和美に敵う人物がいない気がして。

この心の欠片シリーズはキャラ任せであんまりストーリー練らないで書いてる部分が強いので、足止め喰らうと本当に同じ所でグルグル悩みます。

それでも神蔵の時は一話完結に一応していたので良かったんですけどね。唯一のモノは昔からネックで……………。

あと一話で終わると良いなあ……………。  
んで、次の神様の話に取りかかりたいんだけどなあ……………。  
と思っています。

## 美しい悪夢（前書き）

この話は………

まあ・・・いつかあ。

ってカンジです。

スミマセン。日和りました。

## 美しい悪夢

きつと、夢にも思っていなかった。

裏切られるなんて事。

だから前も、今も、間違えたんだ。

そろそろ知らなきゃいけない。人は、誰しも裏切るんだって事を。化かし合い……って言葉が今の状態よく似合う。

平穩に生活しているふりをする。気付いていないふりをする。猜疑心なんて一欠片も見せずに笑える。

そうしないとまた、『自分』が消されていってしまうのだから。

谷口都の記憶を皮切りに、由口京の想いが曲げられて5日。

藤井桜花の記憶が消えて3日。

自分の記憶はいつまで在るのか、その見えない恐怖に怯えてしま

う。都が『自分の思ってることを曲げられたら嫌でしょ？』って言った。その気持ちは今なら痛いほど分かる。

全て忘れたくない。都の身体の形、温もり、柔らかさ、香り。

もう誰にも知られたくないし、渡したくもないのだ。

今の和美なら自分が不用意に巻き込んでしまえばその人間の記憶の全てを操作していくのだろう。それだけの力が彼にはあるのだ。

ガチャガチャッとマンションの扉から音がして、直後扉が開けられた。

突然のことに驚いて振り返ると悪戯っぽく笑った都が立っていた。相変わらず記憶は無い。そのせいなのか自分の知る都よりも少し幼く見える。

「どうやって入った？鍵、掛かってただろ？」

「結界士に愚問ですよ？開けたいから開けちゃった」

「プライバシーの侵害」

「……………ゴメンナサイ」

「何？」

「居るかなあ……………って」

「隣りに居るよ。何かあったら電話してくれて良いし、メールしてくれて良いよ」

「苛々してる？」

「してる。だから今日は帰って」

「やだ。ここに居る」

「……………勝手にすれば」

言い放って彼女の前を通り抜けた。キッチンに入って水を取り出して戻ってくる様を都はずっと見ていた。傷付いたような表情をする。

溜息混じりで苛々の原因を彼女に伝えることにした。

「都、俺ね、君の彼氏だったわけ」

「うん」

「俺も人並みに性欲とかあるからね、都ちゃんが無防備にウロチヨ口してるのはちよつとね」

「私、尚哉のこと好きよ？」

「それ、親愛ぐらいだろ？」

たまたま信用に値する地位を勝ち取っただけのこと。昔で言うなら遙佳のだ。自分に向いていた好意のそれとは違う。

だが都はワカラナイと言うように眉を顰めて首を横に振った。

和美はきつと世界で唯一の異性にでもなる気だったのだろう。都の前に立っている男ども全ての記憶を消していけばいずれ都は和美を選ばざるおえなくなる。

その状況に達するまで何人巻き込めばいい？都のその力で何人の記憶を抜くんだ？

「尚哉は私のことを好きじゃなくなっただって事？」

「……………お前ね」

「だって私は好きなんだもん。仕組んだんでしょ？」

「え？」

「アナタ、私がアナタを好きになるように仕向けたでしょ？責任取ってよ！」

そりゃあもう、偉そうに。でも多分言い出しは心細かったのだろう。少し唇が震えていた。

根本は相変わらずの谷口都で、少し安心する。

頭を撫でてソファに座るように勧めた。

「尚哉は何で学校行かないの？」

「俺、三年だからもう自由登校の方が多いし」

「音楽科の三年ってそんな感じなんだ？っていうか同じ学校だなんて知らなかったし」

「そうそう。お前にバレないように学校に近寄らなかったの」

「手ー込んでるね」

「大事なお姫様の奪還作戦だからねえ」

都の前にティーセットを置いた。目の前のポットを指さすと都が目を丸くして首を傾げる。

「煎れてくれないの？」

「煎れて、くれないよ。お茶は、お前の煎れるやつのが美味しいから」

「むうー……………納得いかない……………亭主関白」

「絶対王政かな？」

「帝国主義じゃないの？」

「命令したことないよ？都が勝手にやってくれるだけ」

「新・都は嫌だと言っている！」

「じゃあ、帰れば？」

「ひ、ひどい……………」

「ウソウソ。美味しいお茶、吞ませてくれないの？」

涙ぐんだ都が熱めの紅茶を自分の前に乱暴に置いた。

カップの中では波打って荒れているが、それでも味はいつもの通り美味しい。

ちよいちよい、と指で呼ぶと都は嬉しそうに対面から隣りに移ってくる。

「良くできました」

そう言って彼女の頭をワシヤワシヤとかき混ぜた。嬉しそうに悲鳴を上げる彼女に小さな違和感。やはり記憶が無いせいなのだろうか？

「なんか、な……」

「なに？」

「いや………どうも別人と一緒にいる気持ちになる」

「じゃあ尚哉の知る『谷口都』はどんなの？教えてよ！」

「まあ、姿形は一緒だけど」

「性格は？」

「まあ………だいたい一緒なんだけど」

「………じゃあ何が違うつて言うんだ！そんなの屁理屈みたいなもんじゃん！」

言ったら、きつと怒ると思う。

無くしたからって同じ人形を買い与えられても困るのと一緒だ。

今の彼女と思い出が無いせいだ。

或いは一年前ならそれでも納得したかもしれない。でも今は積み重ねてきた掛け替えのないものが足りない。物足りないんだ。

（やっぱり………このままってわけにいかない）

いけないんだ、和美。

尚哉が悩んでる理由も薄々。

愚かになりきれないから自分達は迷走するのだ。

何も考えないで求めてくれたら、何もかも思い出すらを捨ててあの胸の中に飛び込む覚悟は出来てる。多分…出来た。

記憶が無くなる前の自分が、だ。

だから、もつとちゃんと確かめなきゃいけない。なんで和美がそんなに頑なに自分を求めているのか、自分はそれを知らないから。

久々の一重本邸は身体が拒否反応を起こした気になった。

応接室に通されてすぐに兄は駆け付けた。少し驚いたように息を乱していて、らしくない。

「九希ちゃん？」

「都…大丈夫なのか？」

「……………」

ああ、この人は全部知っている。

「話を…聞きにきたの。一番知ってる…話してくれると思ったから」と言ったら彼は困った表情をした。

応接間のソファに促されて座るとなんとも言えない沈黙が場を支配した。負けてしまいそうな雰囲気、息を呑むと、九希は見たことも無いような情けない顔で言った。

「ここに都の求める答えは無いよ。お前が求めてた力はお前自身が和美に渡してしまっただろ？それが悪いことだとは思わないけど、良いことと手放しでは喜べない」

「九希ちゃん…私記憶が、ね」

「記憶が戻ったらお前はまた僕を憎しみを込めて見るんだろ？なんの迷いも無い目で見てもらえるのは嬉しいと思っていたのに…思ってたよりもずっと罪悪感が募る」

「九希ちゃん」

積み重ねてきたものは決して幸せなものばかりではないという証拠だ。

尚哉が戻したいものはなんなのだろうか？

和美が隠してるものはなんなのだろうか？

やはり思い出さない方がみんなのためになるというのなら、このまま生きていけば良いんだ。

罪は——全て引き受けると和美は言ったのだから。

「え？」

「都…」

「九希ちゃん、断片的に思い出すことがあるの。私の記憶は消えて

いない」

「多分和美が奥深い場所に埋めただけだろう？消せる力だってあるはずなのに、案外ビビりだな」

九希は苦笑しながらそう言った。久々に垣間見る和美の人間味。完璧な笑顔の下に隠れてる何かは…。

「和美は…私のことが好きなの？」

「さすがに気づかなかったとは言わせないよ」

「うん。でも実感が…なんか和美が好きな『谷口都』と本当の自分のギャップが深い気がして…」

「都、記憶戻ってるのか？」

「え？」

「いや…気の性だ」

「わからない。時々ふと…今の私は思ったことが無いような深い感情が沸き上がるの。一年間の記憶が改ざんされてるって尚哉が言ってた。でも一年間の間にこんなに変わるものなの？」

「たった一年だけど、この一年に都はきっと一生分くらい考えてたからね」

そう呟いて九希は自分の頭を撫でた。

その手は自分の知る兄ではなかった。でも自分を心配する、唯一の兄だともわかった。

「でも私の一年はやっぱり私のものだわ」

「都？」

「私、他人に思わされてるみたいで嫌だったんだけどね、きっと冷たい印象しか感じなかった九希ちゃんを変えたのも尚哉を手に入れたのもこの一年の私なの」

「うん…まあ都は僕のことを虫けらのように嫌ってたけどね」

って九希が目を反らした。そんな拗ねてる兄が可愛くて大笑いした。

咳ばらいをしてそれをやめるように促された。

「とりあえず記憶を取り戻したければ伊織を探すと良いよ」

「伊織？」

「そう。伊織はお前の目の半分を奪って魂だけで逃げてる」

ゴクリと喉が反射的に鳴った。それは不可能ではないのだろう。でも…。

「和美の力は都の片目だから、その片割れを探してあげられればきつと対抗できる」

「伊織の…身体は？」

「今、本家の檻で精神に異常をきたして隔離されてるよ」

一年は重いつて思い知らされた。何があったのか、思い出すことによつて自分は必ず深く傷付くこととなる。

でも自分にはそれ以上に怖いことがあった。

記憶は……… 本当に存在するのだろうか。

『一緒にお買い物に行こう。品川駅にお迎えに来てくれる？』

っていう都からのメールがあつたのは、既に20時がまわつていた。出掛けているのは気付いていたが、随分遅くまで………そしてこの『お買い物』はきつとスーパー。

首を傾げながらも品川駅に車を飛ばした。

オフィスの立ち並ぶ港南口に待ち合わせた。サラリーマンやOLの中に立つ都を見つけるのは容易い。立ち姿が誰よりもキレイだからだ。

俯いていた都が自分に気付いて必死に笑顔を作った。

「乗って？」

「うん！ありがとう」

「九希、なんだって？」

「え？………私、鎌倉行つたって言ったわけ？」

「いつも九希に何か言われる度に落ち込んでここに呼び出されてた。横須賀線で帰ってくると丁度良いんだろ？」

「うん………西大井駅のが近かつたかな？」

「品川で良いよ。人通りの多い交番の横で待ち合わせた方が危なく

ない」

都が今気付いたように振り返って交番を見つめた。

小さく、ああそれでこつち側……と呟く。だいたい九希が鎌倉に引っ込むからこんな風に会いに行くのもいちいち時間が掛かるのだ。その日に帰ろうとするとどうしても夜になってしまう。

「シートベルトして？」

「あ、うん」

「スーパーで良いんだろ？」

「うん。ね、尚哉はご飯食べちゃった？」

「まだだよ」

「ね、ね、お鍋しない？」

「時季外れ」

「良いじゃん！ワイワイやりたい！」

はしゃぐような言い方。九希は本当に何を言ってくれたんだか……。

「良いよ。じゃあ土鍋出さなきゃな」

「やったあ！」

「何鍋にする？出汁取るにはちよつと時間が掛かるからすき焼きとかで？」

「うん！チーズフォンデュ」

「それ……鍋、か？」

「鍋でしょ？超鍋！」

「フォンデュパンどこに置いたかな？うち来るか？」

「オッシャレ！そんなもの持ってるの？いっそフライパンでやろうと思ってたんだけど」

「あっちのマンションには無いよ。銀座のマンションに置きっぱなし」

「……改装中じゃなかったの？」

「ウソだって分かってるだろ？」

「……連れてってくれるの？」

「まあ…… お前のものの結構あるから、無くして困ってるってものは多分そこにある」

「ある！婦人体温計！」

「…………… それぐらい買えよ」

「あとね」

「お気に入りのパジャマと下着の一式が無いのお…………… って？うちに全部置いてあるよ。電動歯ブラシとか、メイク道具とか、生活用品も結構こっちに移動させてたから不便してるんじゃないかって心配してた。後ろに置いてあるバイオリンもお前のだよ」

「都がじーつと穴が空くぐらいの勢いでこちらを見つめた。暫くしてぼつりと呟く。

「結婚でもしようとしてたの？」

「うん。俺はこのまま済し崩しで何とかする気だったよ」

「私、嫌がってたの？そりゃあ勿体ない」

「勿体ない？俺より好物件いっぱいけちらかしてきたんだから、嫌がる気持ちも分らないではない」

「皐月？」

「和美とか…………… 遙佳とかも」

「ハル…………… ？従兄の？」

「お前…………… 関わった男の記憶すっぱり切り取られてるのな？」

「参ったね」

そう言っているうちに深夜営業のスーパーに車を滑り込ませた。

夜風が強く吹いて少し肌寒いぐらいになってきている。薄着の都に自分のジャケットを羽織らせると手を引いて中に入る。

不思議な気分でも彼女にいても、どうしてか自分の子供とでも一緒に居る気になってしまふ。優しくしようとしてしまふし、でも下心が湧かない。

「家族愛…………… か」

「え？」

「いや…………… チーズは何使う？」

「安いので良いんじゃない？ちゃんとしたブイヨンじゃなくてコンソメスープの素で良いよね？白ワイン……………料理酒じゃ流石にマズイかな？」

「白ワイン家にある。固形スープの素も家にある」

「じゃあチーズとお野菜！アスパラとジャガイモとニンジンとパプリカ！」

「パン買おうよ。ウインナーとかチキンとかも良いね」

「あー、ポテトチップス買おう？付けたら美味しそう」

「お前……………今何時だと……………」

「起きてればいいじゃん！」

「銀座から品川に送るの俺だよな？」

「パジャマと下着！あるんでしょ？泊めてよ」

「……………っ」

参った……………って顔をしてしまった。強気で言った都も自分の表情を読んでき、すぐに目を反らした。

「悪い……………今日はやっぱり都の部屋でやろう」

「うん」

今のは間違いなくこっちが悪い。

自分の部屋に帰ってきて重大なことに気付いた。

「……………うちスープの素無い……………料理酒しか無い」

ポツリと呟いたら妙に不安とか不満とか溢れだしてきてそのまま涙の形になって零れた。尚哉はギョツとした顔をしていたがもう止まらない。だってアナタのせいだもん。

なんで泊めてくれないの？

なんでキスすらしてくれないの？

女の子の方から言うにはあまりにも恥ずかしくて言葉にできない  
ままだだスープの素のせいにして涙を流した。

尚哉と知り合ってから随分とこの表情を見た気がする。あやすよ  
うな、参ったなあ……………って顔。

自分が元々付き合っていた彼女だから仕方なく優しくしてあげて  
るんだっていうカンジ。さすがに伝わってくる。

「大丈夫だよ。今コンビニで買ってくるから」

「要らない」

「都？」

「何にも要らないから、私を見てよ」

「都、何言って」

「昔の私がどうか！知らないんだもん！今の私はコレなのにつ！」

「見てるよ」

「見てない！全部比べてることくらい分かるんだからっ！」

少しの沈黙。凶星って表情。

「じゃあ！どうしろって言うんだよ！俺だってどうして良いのか分  
からないのにつ！今まで都と築いてきたもの全て棄ててお前と恋愛  
しろって言うのかっ？重ねてきた日々全て大事なんだよ！嫌な事だ  
ってあったけどそれもこれも全てがお前を造ってきたものの一つだ  
ろっ？」

「…………じゃあ、もしも私が谷口都じゃなかったら……………」

導いてしまった答えは、彼の手を取る手段を消滅させた。

もしも、和美の罠で自分が『谷口都』だと思い込まされてるだけ  
の別人だったならば、今頃彼はほくそ笑んでいる。自分はまんまと  
尚哉を好きになり、まんまと尚哉は自分を都だと思い込んだ。

そんな猜疑心のせいで自分に手を出さないとしたら？

尚哉は首を横に振ってそのまま自分を置き去りに部屋を出て行っ  
た。

それから、彼の部屋の音が聞こえることはなかった。

自分は誰なんだろうか？

誰に聞けば正しい答えは返ってくるのだろうか？

記憶のない空っぽの自分しか残らなかったら、本当は全然違う人  
間だったなら、自分が獲るものは何もないのだ。

本当は怖かった。

いくら自分に力があつたって、幸せはそんなもので得られるわけではないことも十分に分かっていたから。

都が幸せそうにしているのは尚哉の横でだけだって分かっているのに……。

それでも自分が求めているものだって、『谷口都』だけなんだ。いつものように教室から出てくる都を待ち伏せしてピックアップする。その為に少し急いで廊下に出た。華月に嫌がられたって何したって、都に好かれさえすればこの際良いんだ。

都至上主義なのは華月も一緒だから全然構わないだろう。

「都、授業終わった？」

教室に何のてらいもなく入るが教室中ざわめくのが分かる。制服すら違う特進の自分が来るのはイレギュラーなのだろう。

すぐに気付いて顔を赤らめる彼女は、少し前の『谷口都』からは想像できない。でも出会ったばかりの都はこんなカンジだった。あの頃は……そう、尚哉が迎えに来ててこういう表情してた。自分も尚哉の代わりに成れる。出会い直して、育て直せば良いんだ。害虫は全て駆除していけばいい。

「和美こそ、授業出てる？なんでこんなに早くこっちにいるの？」

「先生が授業締める前に出てきたから」

「それじゃサボってるじゃんか」

「良いんだよ。授業内容は聞いてた。小話始まったから抜けてきたんだよ」

都の荷物を取り上げて外に出た。都の転科騒ぎのせいで放課後、彼女が自由なのはこの水曜日だけだ。それ以外は特別レッスンやら自主レッスンやらでレッスン室に籠もっているためなかなか顔も見られない。

都はチヨコチヨコ付いてきて荷物を引っ張った。

「自分で持てる」

「バイオリン持って、鞆持ってさ、都が大量に荷物抱えてるのに俺

「が手透きだと……俺が恥ずかしいの」

「そういうもの？」

「そういうものです。全部は持ってあげないよ？ 鞆は持ちなよ。でもバイオリンは持ってあげる」

「ありがとう」

鞆を返すとニコッと。相変わらず美しい顔を崩して可愛く笑う。  
作っていないその顔が好きだ。

「お茶でもしてく？」

「……うん」

少し間のある返事。とくに最近感じる違和感。

桜花の記憶をいじったことがばれたのだろうか？ 皐月の事でも思い出したのだろうか？ 尚哉のことを……？

それとも……… 沖野和美のことを？

いつまで疑って、いつまで人を遠ざけて、そして何を都にして欲しいのだろうか？

女としての都を今どうしても受け入れられずにいるのは、今の自分だった。

本当は都の婚約者だって言ってしまうえばそれで何の裏工作もなく彼女を抱くことだって可能だ。でもそれができないのは、彼女の『女』の部分を見たくない自分のせいであることも………。

「ねえ、和美」

ふと気付くと都が覗き込むように近づいていた。

そして彼女はおもむろに瞼に触れる。

一瞬電流が走るような感覚。

彼女は自分の力を強制的に戻そうとしたのだ。

身体を離して睨むと都はもう一度邪気のない微笑みを点した。

「和美の目の色、キレイ。金色？」

「え……… あ、ああ」

「前からオッドアイだったけ？」

「ちよっと前からだよ。新しい力、手に入れたんだ」

「そうなんだ？……………どんな力？」

彼女の記憶は戻っているのではないかと。生唾を呑み込んだ。

「和美、お茶飲むところ、指定しても良い？」

「どこ？」

「品川シーサイドの方に教会があるの知ってた？そこに可愛いカフェがあるの。そこに行きたい！」

「良いよ」

「お茶の種類が多いんだって！久々のお茶会だね」

「もう少ししたら夏積みのダージリンとかも出てくるからそしたら都の家に茶葉持つてく」

「……………うん」

また。

この間は、拒絶だ。

「都、何か……………」

「あのね、少し無理して伊織を探してたの」

「九希の所に行ったの？」

「うん。伊織の心が無くなっちゃったって。昨日……………だから少し無理して都内全域に薄い結界を張ったの」

「見つかった？」

「何力所か場所は決まってる。でもすぐに消えちゃうんだ。場所、一番多いのは……………東京駅の地下なの」

自然と足が止まってしまった。

多分誰も近寄りたくなくて、記憶が無いから都はこんなに簡単に口にすることが出来るのだ。

奈月と皐月が死んだ場所。

自分の無力さを呪った場所。

「和美、一緒に来て欲しいんだけど」

「……………どこに？」

「……………東京駅じゃないから安心してよ」

「別につ！」

嫌だなんて言っていないって怒鳴っても彼女にその真意は伝わらない。

でもカツとなってしまうた頭を戻すように頭を振った。もう一度言い直す。

「東京駅だって伊織を捕まえられるなら一緒に行くよ?どこ?」

「取りあえずお茶、しようか?」

少し、彼女の手が震えていた。

だだっ広い……草原とチャペル。それしか無いその場所は都内でも珍しい独立型のチャペルで平日はあまり人気もない。

もちろんカフェもないことは黙って着いてきた和美もそろそろ気付いただろう。

「都、何しに来たの?」

「私の記憶を取り戻しに」

「……………なんのこと?」

和美は美しく微笑んだ。

彼はウソを吐く時はいつも人形のように綺麗な微笑みを浮かべる。その仮面を今日は剥がしていかないといけないのだ。

彼の影が黒く、大きく伸びた。

それは彼がテリトリーを広げた証拠だ。

また記憶を書き換えられてしまう。尚哉から貰ったピアスを掴んで必死に結界を張った。

衝撃波のようなものが身体ごと吹き飛ばす。無理矢理こじ開けられそうになったのを防いだ証拠の痛みだ。

「和美、ちよつと黙ってみて!」

強く言い放つと少し怯んだように影が薄くなった。あれが元々は自分の力だと聞かされても理解しがたい。

(私はあんな使い方しないからかな……………)

思っているうちに定刻通り、始まった。羽化だ。

伊織が生まれる。

教会の中から溢れるばかりの光が吹きこぼれ、でもこの光は常人には見えていない。自分達選ばれてしまった人間のみが目にする、命の輝き。

伊織は毎日ここで生まれ、懺悔をしてここで死んでいる。

それを調べるのに少し時間食ってしまった。

「行くよ！」

「ちよっ……都！」

「私の力なら引き合うつて九希ちゃんが言った！」

そう言つて和美の腕を取り、教会の中に入った。少し自分達の知る伊織より若い姿の彼女が一瞬こちらを見た。

すぐに消えてしまひそうになったので和美の身体を掴んで強く境界を張る。

もちろん、彼の……（多分元は自分の）力を使って。

力が抜けたように和美は膝を折った。

「伊織！」

『いやっ！』

拒絶の言葉。

近づこうとしたら隣りにいる和美に腕を掴まれた。

「何？」

「忘れたいことだつて……逃げ出したいときだつてあるんだよ！分かつてやれよ！別に伊織が逃避してたつて誰も困らないだろ？」

「……じゃあアナタのそれも逃避なの？そんなに……嫌な事があつたの？生きるのはそんなに苦痛なの？」

「思い出したのか？」

「残念ながら皐月のことだね。私、それは忘れたくない」

「そんなのきれいな事だ。あの時、都は……」

「うん……苦しい時のことつて喉元過ぎれば忘れちゃうよね？だからさ、少し見ててくれない？ちゃんと乗り越えていくから」

「皐月の死を？」

「伊織のことも。私はちゃんと自分で考えたいから………きっと思わされたとしてもまた考えるわ」

「そんなのウソだ！」

和美は力一杯怒鳴っていた。だから当然のことを確かめるように尋ねた。

「和美は皐月が死んで悲しくなかったの？」

「え？」

都の言葉が思ってもみなくて力が抜けた。

皐月のことは悲しいとか、悲しくないとかの次元じゃない。虚脱感。

あの時、あの瞬間から自分の力の無さを呪った。肝心なところで何もできない自分と神を呪ったんだ。

でも泣いたら何か起こったのか？

皐月が生き返ることはどうしたってないじゃないか。

「和美……？」

だから都の記憶を消したんだ。桜花のも。自分にも自己暗示をして。

それなのにどうしてもこの女は自分の琴線に触れるような事を言うのだろう？そんなに怒らせたいのか？

彼女の細い首を掴んで爪が食い込む程絞めた。何もかも、おしまいにしてしまえば……。

「和つ美……！」

「一緒に死んでよ！」

「嫌っ！私、生きなきゃ！生きなきゃ！皐月の分も、奈月の分も……！」

「ふ、はははっ！都はいつも俺の事なんかお構いなしだな！」

「私は和美くんと生きるよ！死ねないけど……ずっと言ってるじゃん。私あなたの唯一の相棒なんだよ？」

首を絞められている都の声はもう掠れていて近くないと聞こえない

いくらいだった。

手に思いつきり力を入れればきつとすぐに彼女を殺せるはずだった。でもそれができないのは都の身体から放たれてる白銀の力のせいだ。

舌打ちをして、彼女の結界術の方に手を掛ける。簡単には解けないその力は一人の結界士によるものとは思えないほど強固だ。それが覚悟だと言うならこちらにも考えがある。

首から手を離すと彼女は必死に呼吸をした。その無防備に開かれた唇を無理矢理自分のモノと重ねた。

（自分から死にたくさせてやる…）

都のシャツを引き割いた。彼女は何か叫んだように見えた。

でも自分は彼女を傷付けることに夢中だった。

でもすぐに熱が冷めるように引いていく。

涙が勝手に溢れ出して止まらなかった。

「馬鹿ね…」

都がそう呟いた。

自分にその覚悟が無いことを彼女は気付いていたに違いなくて恥ずかしくなった。

結局、出来ることは泣くことだけで…自分の不甲斐無さは消えない。

「和美、もうちょっとだけ付き合って」

「都？」

「私が行けない場所に行きたいんだ。だから伊織を捕獲するわよ」

そう言っただけで彼女は鮮やかな手つきで封印具を手に掛けて、伊織の魂を捕獲する。

そして向き直るとこう言った。

「無の塔に行くよ」

「え？」

「サクラに会いに行く」

「でも」

「有資格者は和美と私でしょ？」

伊織の力から抜き出した都の力を左目に入れて彼女の金色の瞳が再び輝きを取り戻した。ああ、やっぱりこっちの方がキレイなんだ。戦っている時がキレイなんだ。

少し……寒気がするほどに。

無限の塔は自分達の呼びかけに答えてすぐに現れた。

今、資格が二分している今しか自分が入れない場所に。

「サクラ」

聞いていた通りの小さな女の子が出迎えに現れた。その子に和美は『サクラ』と呼びかけた。

覚えていないことも承知、というような達観した目で彼女は自分をみつめる。

「あの……」

「お帰りなさいませ、都様」

「私、生きたい場所があるんです。神様じゃ入れない場所があるって九希に聞いたの。神としての力を和美と分けている今なら入れるんじゃないかって」

「ええ。少しお辛いかも知れませんがそれでも宜しければ」

「お願いします」

「では……どうぞ死の部屋へ……」

生を司る神が唯一入ってはいけない場所。

生という領域から旅立った者達が集う場所、それが死の部屋。

サクラはそう言った後に何度も強く自分達に言い聞かせた。

『お二人で力を分けていたとしてもあなたがたは招かざる客です。くれぐれも長居は無用ですよ』

その扉は仰々しい名前には似つかわしくない小さくて古い木造りの扉だった。

少し蝶番の錆びた音がするそれを押し開けると目を疑った。

「外？」

都が首を横に振った。

「これが死の部屋なんでしょう？」

「これじゃまるで！」

「生きてるのと一緒によね？今生きている人がいないだけで」

都は扉の中に入って奥に進んだ。一人で行かせる訳にも行かず、彼女の跡を追った。

少しだけ身体が重いのは、神籍に入ってる人間が入ってはいけない場所だからその分の負荷になってるらしい。

都は中に入ってすぐその広い空間の勝手を知っているようにズンズン先に進んだ。闇雲に動くような広さでは無い。本当にパラレルワールドのように空があって、地平線が見えるのだ。

「都！どこ行くんだよ！」

「ここまで来てちよつと散歩なんて言わないでしょ？」

「だから……っ」

「臯月に会いに行くよ」

そう言った都の瞳が鈍く光った。力を使った時の合図だ。

「何を……？」

「気配を探してるのよ」

「そっか」

「和美が連れてってくれると嬉しいな」

と彼女はしっかり自分の身体に捕まってニツコリ駄目押しで微笑んだ。拒否権のなさそうなお願いをされて……断る言われも無かったので都が指差す方向に移動を始めた。

「わー！ラクチーン」

お気楽な台詞を吐く都の顔色はあまり良くない。自分も都の身体を抱えて空中飛行は思ったよりも力を使わされている。

これはきつとこの部屋特有のモノなのだ。本来ここは時空術の修業部屋に当たるらしく、いちいち術を使うのに負荷が掛かる。都にもきつと……。

（本当に帰れるだろうか？）

余分な体力を残しておかないと出られなくなりそう。出られなくなったら死んだことになるのかな？

都がふいに舌打ちした。

「何？」

「アイツ…移動しやがった」

「え？何？」

「逃げ回ってやがる…」

「都…尚哉みたいだからその喋り方やめて」

「ウソ？口癖移ってる？」

「うん…いつから記憶戻ってたの？」

「…戻ってないよ。さっきも言っただけど、皐月のことしか思い出せないの。あとは全部あやふや」

「それでも」

尚哉が裏で頑張ってたとしたって二人は勝手に出逢って、都は勝手に尚哉に惹かれている。

なんだか自分が滑稽で、可哀想になって笑いが零れた。

「はは…っアハハハっ！」

「か、か…ずよし？」

「都はそんなに尚哉が好き？」

「今の私が答えても本当の意味にはならないと思う」

「そうだね」

でも自分は都の積み重ねてきたものの全てを捨てさせても自分の我を通そうとしたんだ。それをして都は自分を選ばなかった。間違いない自分が有利だったのに。

自分に捕まるこの腕は、恋人として伸びては来ないのだ。

滑稽な自分を笑っていたはずなのに瞳からは涙が溢れ出てきた。

本当に可笑しいな…。

「和美！それ後にして！頭切り替えて！前っ！」

都の声とほぼ同時にどこかの生け垣に突っ込んだ。衝撃が身体に

走って、咄嗟に都を守るように身体を丸める。

視界がクリアになった頃ようやく自分がひっくり返ってること  
に気づく。都が身体を起こして自分の上からどいた。

場所には見覚えがある。

「ここ…」

「死の部屋に居る人の思い入れの強い場所が残るんだね…。地理的  
繋がりが全然無いし」

まんま藤井の本邸だ。

皐月の強い思いで形作つていいると言うのなら、ここに彼は居るの  
だろう。

この場所以外は森や…海や…ただの大地…空…大まかな世界しか  
創られていなかった。

「行きますか？和美は身体平気？」

「あ、ごめん。都こそ大丈夫？」

「うん。和美が守ってくれたんじゃないか！」

「なら…良かった」

自分の言葉に都が目を見開いた。

「何？」

「なんだ…そういう和美くんもまだ残ってるんじゃない」

「は？」

「本当は優しくしてお節介焼きだって知ってるし！そういうところ結構  
好き」

破顔して彼女はからかうように自分を指さした。

都は、記憶を戻してもまだ同じことを言ってくれるのだろうか？  
急に不安になった。いや怖くなったんだ。都にしてきた酷いことを  
こつやって笑って許してくれるのだろうか？

今までと同じように彼女の隣を空けてくれるのだろうか…と。

どうしても…だ。

逃げる彼の気配を追い掛けた。瞬間移動をしないとこをみて、彼

は未だ力を使うことに抵抗があるようで、そこは感謝した。

だがこの世界は自分達に優しくない。

負荷は自分だけじゃなく和美も巻き込んでいるって肝に命じて進まなければ。或いは、和美だけでもこの世界から出さなければならぬのだから。

藤井の屋敷の扉は強固に鍵が掛けられていたがこんなのは自分に通用しない。皐月も知っているはずだ。長く結界専門に向き合ってきた自分には、扉の鍵開けなんてお手の物だ。

「都、ここ…」

「馬鹿なのよ」

自分も括ったその言葉は未だ囚われたままの皐月に届くだろうか？  
彼に「会わない」と本当に決め込まれたなら…決して会えないの  
だろう。ここは平等な世界では無いのだから。でもまだ余地はある  
と、感じるのだ。詰めめ甘さは、彼の「会いたい」という声なので  
は無いかと…。

もちろん本当に詰めめが甘いだけなら、ただの独りよがりだ。

「でも…私は会っわ！」

誓うようにそれを、口にした。

中は長く続く廊下。実際の屋敷内よりも随分広く永久に続いている。  
外も無限の広さ、中にも無限回廊って、まるでいつまでも目的に  
辿り着けない夢の中だ。

まっすぐ突き進もうと勢いづけて走り出すと和美に首を摘まれた。

「なっ！」

「こっちだよ」

と壁を指してる和美の腕が壁をすり抜けた。  
虚像？

驚いてると和美の瞳も金に鈍く光った。そうだ…それが自分の力  
だ。真実を見いだす瞳。

そこから先は二人とも力を全開にして走り抜けた。幻で誤魔化す  
なんて許さない。ちゃんな結界でなんか足を止めたりしない。

切り裂くように結界を開けた先に見覚えのある雑居房が待っていた。息が上がっている和美はいらつきながらその扉にも手をかけようとした。

「待……て」

「何？早くしないとまた逃げられるよ？」

「ここずっと皐月が閉じ込められてた場所なの」

怪訝そうに和美が顔を歪めた。彼には分からないだろう。

でも自分には分かる。同じ穴のムジナ。

ずっと彼は囚われているのだ。

だから、出してあげたくて……。

「皐月！皐月！」

自分で出ないと何も変わらない。死んでなお縛られることはないのだ。

勢い余って扉をガンガン叩いた。和美が慌てて止めに入って、何か言ったのも全て振り払って……。

自分達は生きている間で決して交差しなかった。でも思いは一緒。皐月！あなた私のこと好きでしょ！好きなんでしょ！？」

引き戸がガタガタと開け辛そうに引っかかりながら開けられた。

気まずそうな表情の皐月は自分の記憶の中にあるものと一緒。自分の頭にポンッと掌を跳ねさせた。

「都……それを自分で言っちゃお終いでしょ？」

「でもこんな私が皐月は好きでしょ？」

「うん……多分ずっと変わらず好きだったよ。尚哉を好きな都のことが好きだったんだ」

「私も……桜花を好きな皐の事が好きだったんだ」

だから絶対に交わらない思い。それでもその事実を確かめるように皐月の手を両手で握りしめた。今までいっぱい抱きしめて貰ったりしたけど、ここではそれ以上をしてはいけない気がして。その手を握んだままボロボロと涙を零した。

「和美は何やってんのさ」

「え？」

「都に唆されてこんな所まで連れて来ちゃって。コイツ、目離すとトンデモお嬢さんなんだからしっかり見張ってて」

「あ……………うん。皐月！俺！」

「何？」

「謝りたくて……………」

「それ以上言ったらここから出さないよ。それはダメだ。自己満足なら自分のベッドの上でやってくれ」

「ごめん……………」

「和美……………俺今謝るなって……………」

「いや、そうじゃなくて！いや……………じゃあ……………ありがとう。ここに来られて本当に良かったのは、きつと俺なんだ。皐月の顔、見るこ  
とができたら随分救われた。俺プレッシャーに負けそうだっただけ  
なんだって……………」

「そう思う？じゃあちゃんと都のことを面倒見るよ？お前のパート  
ナーなんだろ？こんな鼻水垂らしたヤツだけど……………」

「うわっ汚っ！？」

皐月が部屋の中からティッシュを取って来て自分の鼻を咬ませた。  
まんま子供のようにあやされて、それでもまだ涙は尽きなくて、二  
人にずっと迷惑掛けた。

ようやく都が落ち着いて、本題ともいうべき内容を彼女が口にし  
た。強行突破に近い方法でここまで来た彼女の目的、それをようや  
く理解することとなる。

「皐月、力を返すわ」

「何？どうということ？」

皐月が首を傾げた。

自分も少し分からなくて……………でも都がポケットから取り出した  
封印具を見せて分かった。すっぱり抜けていた事実には愕然とした。

伊織は皐月の移動能力を持ったままにいるのだ。だから彼女は誰

にも捕まえられず、だからこそ都だけが彼女を捕らえることができたのだ。移動能力を縛る結果…… 皐月の性質をよく分かっている都にしかできない行為だ。

「都…… 伊織をそこから出すのか？」

「出さないと力を回収できないでしょ？」

「ここで…… 死の部屋で逃げられたら捕まえるのは面倒だろ？」

中にいる者の創造力で無限にもなる空間だ。伊織が逃げ込むには恰好の場所に違いない。だが自分のそんな忠告も聞かずに彼女は封印具を開栓した。

ただし、彼女の瞳は強い金色に輝いていたが。

「みや……」

「逃がしてなんか、やらないわよ」

その呟きとともに出てきた伊織は先ほどよりも一回り若返っていた。力を失いつつあるということが一目瞭然。都の…… 神の力を失った人間が長い間自分の身体から抜け出ていれば当然考えられることだった。

「そのまま死ぬ事なんて、絶対許さない」

都は変わらず都で、前と変わらぬその言葉にきつと後から後悔するのだろ。自分の責任の重さに葛藤するのだろ。それでもその言葉を何度も吐き続ける彼女を好きになったのだ。

結局変わらない。

きつと何度彼女の記憶を消したって、選び取るものは一緒なのだ。自分が変わらない限り。

気付かぬうちに強く拳を握りしめていた。皐月の冷たい手が自分の手を解くまで、爪が食い込んでいるのにも気付かず。

「罪を、どうやって償えば良いかなんて私だって分からない！でもそれはダメ。死んで償えるものなんて一つもないわ」

都の言い様に伊織の精神が震えるようにもう一回り小さくなった。理解するのを拒絶するようにすり減っていく。

そんな方法では埒があかないこともみな分かっていた。強制的に

戻してでも、伊織は伊織なりに整理する時間が必要なのだ。

「伊織！」

「都、強く言ったってこのままじゃ伊織は消えてしまう」

「私は……………」

「都の記憶は皐月に関することだけなんだよね？伊織が皐月を殺したから伊織に怒ってるんでしょ？」

「え？」

「都の記憶、全部戻してあげるよ。もしもそれで変わらずに同じ事を言えるなら……………俺が責任持って伊織を連れ帰ってあげる。でももしも都がそれで逃げ出すようなら俺は君をここから連れて逃げるよ？」

都が一瞬目を丸くした。何を言ってるの？というように首を傾げた。

都を何からも傷つけられないように、外的に晒さないように真綿でくるんで守ってあげたかったんだ。一番美しいのは戦ってるとき、自分の横にいるときだって分かっていて、その美しい人に惚れたことも分かっていて……………それでも彼女を守りたかったんだ。

彼女はいずれ戦場を選ぶ。

だけど、ここで逃げるようなら連れて行く。

戦場という選択肢の存在しない世界に。

「本当のことは、きっと苦しいよ？」

「嘘の方が苦しいわ。無痛でも傷付いていないわけではないのに……………」

……………私はちゃんと傷を癒すためにもここで逃げたりしない」

しっかりと瞳を見返して、彼女は言った。

そんな都がずっと好きだったんだ。

「わかった……………」

自分の手に堕ちたりしない都が……………大好きだったんだ。

手を都の瞳に伸ばした。彼女は一瞬トラウマにでもなっているように肩を震わせた。その時の記憶は無いはずなのに。彼女を傷つけたかったわけではないのに、そう思って自嘲の笑いが零れた。

瞳から手を離すと彼女は自分の手を握ってしつかりとした表情でこう言った。

「ありがとう」

都は………変わらない。

鎌倉、一重本家。

伊織の身体は目覚めぬまま。

恭しく安置された彼女の身体は未だに身分が神の妹として。人殺しをした罪人として罰せられることは法的にも、一重一族としても無いのだ。

青白い、精気のない顔色は元々も起因する所だろうが更に増している。

都に似ているその顔の作りも一員なのだろうけど。

我が恋人は残念なくらい人間的な表情をする。人間でありたいと、彼女が思うからだろう。反して伊織は神でありたいと願う。

似てない姉妹だ。

「尚哉」

「九希？何？」

入ってくる気配には気付いていたが振り返らずに返事した。彼女達の兄は今回の件にも頭を悩ましているのだろう。疲れたような声の響きがする。

「何って……こっちのセリフだ」

「伊織に面会に来てただけ。この間、都も来たんだろ？」

「ああ。なんか随分幼くなったた」

「そー……なんだよな。せっかく俺が大人の女にしてやったのに」

「前から言ってるが、都とはもう別れなさい。尚哉だって本当に家督を継ぐなら都ではだめな事ぐらい分かってるだろう？」

「ワカリマセンね」

「尚哉………」

「今はどうせ都の記憶が無いんだから関係ないでしょ？それともお

兄様と和美の思い通り、都に和美選ばせろって事か？」

「僕だって……っ！」

「それともお前が都を幸せにするとでも？」

嘲るように笑うと九希は萎むように下を向いた。

「幸せに……… なりなさいって言えないことも分かってるだろう？」

「俺が、必ず幸せにするよ。安心して御隠居してなよ、オニイサマ」

「尚哉…まじめに言ってるんだ。都のこともそうだけどお前を心配してる」

「なんで？飛澤が失くならうと俺は困らないよ」

「飛澤はそろそろお前の力を封印したいんだろう？」

「そろそろ、だな…。桜花もだろ？」

自分達は大人になって力が完全に消え失せてしまいう前に保存のため封印をする。各家で条件は違えど失せるまで使う当主はいない。

飛澤にも藤井にも、もう他の人間はいないのだ。必然的に時期は早まる。

都が無茶をしても追い掛けることすら出来なくなる時期が来るのだ。

辛いのはきつと自分だ。九希はそれを言っているのだ。分かってる、つもりでいた。

「俺達のことは俺達で決めていくよ。少なくとも家に決められたくない」

自分の言葉に九希はゆっくり頷いた。

「…上に桜花が来ているから行こう」

「え？なんで？」

「皐月のことでたまたま。和美、記憶操作したんだな？」

「ああ。アイツ馬鹿だから自分で罪を広げて身動き取れなくしてるんだろ？何もかも無くしてからじゃ遅いのにな」

「余裕だな？和美に都を取られてここに現実逃避しにきたのかと思つたのに」

「余裕じゃないけど…何もできないんだって分かっただけ。俺はい

つも肝心なときに何も出来ない」

「いつも都を支えてくれてアリガトウ」

「ナニソレツ！？厭味っ??」

ふふふって、都に似た顔の男は美しく微笑んだ。

昔は彼の表情から生気みたいなのは一片たりとも感じなかったのに随分と人間らしくなったものだと感じた。

コトつと物音がして目をやると桜花が覗くように立っていた。上に待たされていたのに痺れをきらして降りて来たらしい。相変わらず落ち着きの無いお嬢さんだ。

「九希さん…ここは？なんで伊織さんが…？病気？」

寝かされている伊織を指差して桜花は呟いた。当然の反応だが、めんどくさいことこの上ない。

コイツは周囲の中でも日本語の通じない人ナンバーワンだ。

面倒事、事この件に関して、自分の説明責任は無い気がして桜花から目を反らして一步下がった。

九希も面倒だったのだろう。いつもの人形のように完璧な似せスマイルを貼り付けると、「上に行こう」と切り出した。誤魔化す気だろう。

「…にいさ…ま？」

小さな、小さな声だった。多分それは当人に呼び掛けたのではなく、夢の続きに話し掛けるような響きだった。だが九希はいつもの余裕は一切無くして駆け寄った。

ああ…コイツだって妹達の間で葛藤していたのだろう。

夢現だったのは一瞬で、すぐに正気を取り戻した伊織はすっと身体を起こしてしっかりした顔付きで周りを見渡した。

「ちゃんと戻ったのか？」

「ご心配おかけしました。尚哉さんと桜花さんも。逃げていた場所で和美さんと都様に会いました」

聞き捨てならない名前に今度は自分が駆け寄った。

「誰に、会ったって？」

「和美さんと都様。…あと、さ…皐月さんに」

「それは…随分良い夢見たね？」

「夢じゃないです。あの人達のせいで現実引きずり戻されたんですから」

「…なんで和美と一緒に？」

「私は知りません。二人で相変わらず引っ付いてましたよ」

頭にカツと血が上り、桜花を振り返った。

「おいっ！桜花！面貸せ！」

「え？は？ええっ！？？」

「行くぞ！」

桜花は自分が差し延べた手を反射的に掴んだ。手を引っ張って身体を搦め捕ると、九希に軽く目配せして桜花の身体に残る皐月の守護を引っ張り出した。

死んでもまだ色濃く残る皐月の念は桜花を取り巻いている。おかげで自分は都を追い掛けることが叶うのだから、たまには役に立って貰うよ。

ねえ、皐月？

突然クリアになった記憶は、世界を違う色に見せた。

会いたかった皐月がいる事を、先程と違う気持ちで対峙する。

「都」

「皐月、私…逢いたかったんだ」

ただ、この人に逢いたかったんだ。

それだけでいろいろ泣きじゃくって、いろいろ奴当たったり、躁鬱状態を繰り返していたと思うと…。

昔のように触ることは少し躊躇った。

見惚れるくらいに美しく笑って皐月は自分の腕を引っ張った。

「なんでそんな緊張してるの？今更」

「今更？」

「都と俺は運命共同体だろ？」

「え？私まだ死なないわよ？」

「お前は俺にケンカを売りたいのか？」

「代わりに楽しんで生きてあげる。桜花のこともちちゃんと側で見てあげるし、私もちゃんと幸せになる」

「うん！幸せになつて？」

皐月にしがみつくように抱き着いた。

皐月も力いっぱい抱きしめ返した。

これで最後だ、とでも言うように。

いつも優しいと思っていたその腕も今日は壊れるかと思う位に力強かった。

溢れそうな思いを零すことなく押さえ込んだ。全て自分のものだ。もう、大丈夫。

「行くね、皐月」

「うん。さようなら、都」

「さようなら、皐月」

トン、と和美の方に身体を押された。

和美の腕が自分の肩をつかみ取る。

「和美は…またな？その力を都に返したらまた来いよ」

「え？皐月？」

和美が何か言おうとした瞬間に扉が目の前に現れて強制的に部屋から排出された。強風に晒されて、和美の腕にしがみつくように掴んだ。

気が付くと二人、無の塔の一階広場で尻餅突いて放心していた。

なんだか体中が怠くて痛い。

「和…よ、し」

「都っ！？大丈夫か？」

二人で身体の無事を確かめ合うように身体を触った。自分達は今まで生きていない世界にいたのだから。少しして和美が安心したように緩んだ顔をした。

自分もようやく落ち着いて周りを見渡した。

「あ、れ？なんで？」

無の塔で有り得ない顔触れが自分達を睨んでいることに気づいて首を傾げた。

小柄なサクラを挟んで尚哉と桜花が立っている。

「なんで？…じゃねーだろっ！？どうしてお前はそんなに無鉄砲なんだっ！！」

「あ…はははー、尚哉怒ってるう」

「都！」

「うん、尚哉。私はもう大丈夫」

立ち上がってふらついた自分の身体を彼の手が支えた。

「何が大丈夫なんだよ？」

「だってこんなに優しい彼氏がいるしっ」

「都…記憶」

「戻してもらった」

少し尚哉が目を見開いた。躊躇ったように伸ばしかけた手を引っ込める彼に少し不信感。

「尚哉…？」

「いや…同一人物なんだけどさ」

「うん」

「浮気してたみたいな罪悪感が…」

「はあ？」

「いや、でも結局は元の方の方が良いって思ったんだけど」

しどろもどろで話す彼の姿が珍しい。葛藤があつたのだろっ。

でも記憶が無い間の記憶もある自分としては、尚哉の一苦労も始終余すところなく見てる訳で、苦笑して尚哉を抱きしめた。

ねえ皐月、私この人のことが、好きなの。

自分を一番愛してくれるこの人を、愛してるんです。

目を置いて、和美は結局都の力を全て預かることにしたらしい。都が少しでも心の整理を付けるように。

……… というか和美の方が神の才能があるのだろう。自分の本当の力じゃないって言うのも強い所以かもしれないが負担にならないらしい。

自分はというと、都のマンションから完全に荷物を引き上げてきて、あれ以来都とあっていない為体。

どうしたらいいのか分からないというか………。

分かってしまったんだ。簡単に自分の事を全て許したりしない都が好きなんだという不毛。

そろそろ進学のためにも学校に行かないと話にならなくなるので明日こそは行こう……… なんて思ってる昼下がりの銀座。

色々考えていたって都みたいに何も食わずにいる訳にもいかないうち盛りが憎たらしい。食が細って何も食べなくなる彼女は自分をゆっくりと殺そうとしているようにも見えて気持ち悪かったが。

平日であつても人の多さはあまり変わらない。高校生ぐらいの自分が私服で歩いていたら結構誰も気に留めないものだ。（高校生に見られたこともないが………）

作るも面倒で、カフェでも入って何かつまんでしまおうか、と周りを見渡した。

ガラス張りのショーウィンドに写りこんだ目立つ存在に気付くまでは………。

「あつ………」

つい、だ。

自分に会いに来てるというのも分かっていて、でも一目散に大通りを走り抜けた。彼女を撒くように。

息を呑むほど美しい人・谷口都。

アイツはこんな時に追いかけてくるような人間じゃない。どちらかと言えば先回りしてゴール地点で待っているような頭脳はの彼女だ。ある程度逃げれば……… あとはきつとマンションに帰らなければ撒ける。今会ってしまうと自分の決心だって揺らいでしまいそうで。

都が神になる決心をしたその時は……。

心に決めたから……。

だが自分の予想に反して都は本気で後ろから追いかけてきた。大通りを曲がり、並木通りに差し掛かり、小径を抜けて、ビルの中をショートカットしても彼女を撒ききれない。

（アイツ……… どんだけの体力と運動神経だよ）

こちらは人生で一番体力のあったと言っても過言じゃない十代の男だ。体力も運動神経も自信があるというのに、都を撒けない。

それどころか距離はいつの間にか詰められていて……。

「なお……」

襟を捕まえられて、どこかの雑居ビルに追い詰められるように掴まってしまった。まだ制服の彼女はきつと学校帰りにやってきたのだろう。どこに居たって強力なサーチ結界で居場所を突き止められてしまうのだから無駄なことをした訳だ。

急に止まったものだから自分も都も息が上がってなかなか上手く話せなかった。噴き出る汗を拭いながら少し笑ってみる。

「な、にか用？」

「うん」

都は自分の襟をグイッと引っ張って絡め取るように唇を重ねた。汗の味のする強引なキス。人目のある場所でこういうことをするよなタイプでは無かったので驚いた。

きつと周囲は何かの撮影じゃないかと思ったのだろう。自分達の周りには人混みができていた。

「ちょ……… つ都」

「尚哉」

「ん？」

離れようとして身体を離そうとしたら都は花が綻ぶように微笑んだ。

そして自分を縛る言葉を紡ぐのだ。

唯一の、ヒト。

## 美しい悪夢（後書き）

多分恐らく後から改編します。

でも遙か彼方を書いてしまいたい気分の時に書きたい！

この話の主人公は……和美君でした。

誰がなんと言おうと！

でも自信がなくなるくらい悪役色が強く……次の話も本当に和美メインなんです。

っていうか、都がメインでは無い話なんです。

都と尚哉にはそろそろバカンスにでも行って貰いたいんですよ。

でもきつと私は尚哉が好きだから誘惑に負けて出しちゃうんだろうなあ………と思います。

後日／ふたつ。(前書き)

尚哉のヘタレで終わった唯一のモノ。  
そのヘタレをもう一度お復習いします。

## 後日／ふたつ。

ショーウィンドーを飾る夕焼けのような鮮やかな色。  
やけに目を引いてその場に立ち止まった。

きれいな色のグラスが宝物のように置いてある。

「良いなあ…こういうの」

お揃いのグラス、色違いのマグ、夫婦箸とか。

最近ずいぶんこういうのに興味があつて、物色してしまうこの頃。  
すっかり嫁気分。相手はいろいろ乗り越えてしまつて、全くそんな気なさそうだけど。

なかなか温度差が埋まらない自分達の関係に、ずっと藻掻いている谷口都です。

いろいろ有りすぎたと言えいろいろ。でも恋人・飛澤尚哉と付き合つてまだ2年。

お互いに一生を預ける見極めとしては短いのだろう。

でも結婚指輪が欲しいって言つたわけじゃない。このくらいなら良いんじゃないだろうか？

付き合いはじめて二年のお祝いに。尚哉の誕生日に。大学入学のお祝いも。

なかなか会えない恋人に思いをはせて。

目線を上げて、グラスをもう一度見つめる。美しい曲線のフォルム。色彩、両方に惹かれればもうこれしか無いのだろう。

だが値段を見つめて後退る。

「た…高っ!？」

正直言つて、プレゼントにする相場の額をかなり超えてる気がする。もちろん超セレブ彼氏・尚哉も破格のお値段の物を自分に与えるのでそこらへんは気にするべきではないのかもしれないが自分が買うのは躊躇う値段が貼つてあつた。

(ここ、銀座だもん…お手頃価格は中で引っ込んでるよね)

と勝手な被害妄想しながらショーウィンドーにもう一度張り付いた。お金は無い訳ではないが最近専ら目標を持ってお金を貯めてるから節約中だ。でも目標と愛を天秤に掛けたと聞けば尚哉はブチ切れるのだろう。

その尚哉の姿を想像したって買う気合いはチャージされず。

中からもあんまりにも激しく自分が悶絶している風に見えたらしく、きつちりスーツを着た男性の店員さんが出てきてしまう始末。

「気に入りましたか？」

「あ…でも予算オーバーで…」

「こちらのものは…そうですね。もう少し手頃に作っているシリーズもあるのでぜひ中でご覧下さいませ」

ニコツと40手前くらいの品の良い店員さんは微笑んだ。きつと恋人に贈るためとは思ってもみないのだろう。ちょっと早い母の日のプレゼントとも思われたに違いない。言い出しづらくなつてまごついてると扉を開いて道を作られてしまった。

中を少し覗くと宝石のように厳重なショーケースがいくつも並んで見えた。

そもそも、ここに飾ってあるコレじゃなきゃ自分は納得しないだろうし。道具士でもある自分がどうしても欲しいと思ったのなら間違いないのだろう。目利きの勉強だって今まで散々してきたのだ。

「あの……………」

「はい」

「他の商品は結構です。飾ってあるヤツを見せて戴けますか？」

\*\*\*

暫く身边がごたついていた……………というのは言い訳なのだろう。

会いたくなかったって言ってしまうばそれまでだ。

最愛の恋人・谷口都を避け続けている情けない自分に嫌気がさす。今までになく障害物が少ない。

『ホラ！どんとこい！』みたいな諸手を挙げた状態がとうにも耐えられないひねくれ者っぷり。だからと言って都が好きなだけは確かなのだ。

今までなかなか逢えなくてもなんとかして作ってきた時間を、時間が有っても逢っちゃいけないと思う自分。

……………という自分を恋敵である和美に相談してしまう為体。

「最近の尚哉は本当に……………本格的に駄目な人だね？」

コーヒーショップのカフェラテにガムシロを3つ注ぎ込む和美の手元をジッと見つめた。自分を駄目出しされてるって分かっていてもその甘党っぷりにはいつも顔を顰めてしまう。自分の行為の前に病気になるいうちにそれをやめなさい、と言ってしまいそうでもちろん口にしたとたんに和美はマシンガンの如く撃ち返してくるのだろう。

「……………都が色々あって、一つ一つ傷付いて、俺が思っている以上のことを都も考えてるだろ？怖くなったんだよ」

「都は尚哉と付き合う前から計り知れず色々考えて、色々勉強してたの。でも尚哉がゼーんぶ人権無視してきた、だ、け」

「でも昔は考えが浅かったって言うか……………」

「そ？どっちかっていうと今の方が明け透けにしていると思う。好きなものは好きって言うし、嫌いなものは嫌いって言う。そこは尚哉のお陰だと思うよ」

「うん……………なんでだろうな？」

「はあ？って言うか、なんで尚哉は俺に訊くわけ？少し気を遣うと出来ないの？」

「ん？」

「俺、都にフラれて傷付いてるんです」

「和美はそれでも都の事を知ってたいだろうし」

「余裕がムカツク」

「だな」

って笑ったら和美は予備に持ってきていたガムシロをこちらのグ

ラスに注いだ。

「うわっ！おま……………サイテー」

「尚哉は少し糖分取って脳みそに栄養あげなよ。血巡ってないんじゃないの？」

「……………あまい」

「尚哉、谷口都も普通の女ですよ。愛されたいだろうし、愛したいだろう。逃げる相手といつまで恋愛するのか見物だな」

「……………逃げてなんか」

「逃げてるだろ？浮気されても知らないよ」

「あいつはしない。俺のことが好きだから」

「……………俺が理性的な人間で良かったデスネ……………今一瞬すごい殺意を覚えたよ」

と、和美は地獄の底からから上がってくるような笑い方をした。

だって自信あるし、と居直ると平手で頭を叩かれた。何度だって叩けばいい。

それで他の男が気が済むならいくらでも受けてやる。

\*\*\*

「ユウちゃあん」

「どうしたの？弱々しい声出して」

「聞いてくれる？」

「もちろん」

「私、なんだか尚哉に避けられてる気がする」

口にしたら涙目になってしまった。

事情通の友人・華月祐子はそれを聞いて一瞬目を泳がせた。すぐにクスって笑って肩をポンポンと叩くと「帰ろう」って言った。教室から引きずり出されるように袖を引っ張られる。なんだか部外者って言われてるみたいで更に泣きそうになりながら身を任せた。

「ユウちゃん…」

「あのね、私はずっと言ってる。飛澤先輩はみやちゃんに合わないと思うの。それでも好きなんでしょ？」

「うん」

「みやちゃんには幸せになってもらいたいの」

「私もコウちゃんに幸せになってもらいたいの！」

「みやちゃん！」

二人とも相思相愛。抱き合う後ろからコホンと咳ばらいが聞こえてそちらに視線をやった。

和美が白い目で見ている。

「あら、ヤキモチやかないでね？」

「あのね、華月……」

「ふふっ」

「まあ……いいや。都、尚哉に会いたい？」

つて、悩みの解消方法を提案されて思わず食いついた。

「会いたい！」

「じゃあ黙ってついて来なよ。静かに待ってるなら逢わせてあげる」

「静かに？」

「静かに。準備するなら早くね！品川に2時間後」

「行きます！」

「じゃあ目立たないようにお越し下さいませ」

「うん！」

すぐに用意しなきゃ！

大きく祐子に手を振って駆け出した。二人ともかなりの呆れ顔。

こんな風にめちやくちゃんになっちゃうのは尚哉のこととだけだから。

だからせめて、逃げないで欲しい。

\*\*\*

甘いアイスコーヒーをいっきに飲み干すと見計らって和美が席を立った。

ちょうど雨が本降りになってきてたのが窓から見えた。

「花冷えて少し寒いな」

「もうほとんど散ってるし春なのに。尚哉の誕生日はいつも温かかったよね？」

「俺様のために花が祝ってるんだよ」

「おめでとう。プレゼント、冷え切っちゃってるから温めてあげてね」

和美が店の外に自分を押し出した。何かと振り返ると扉から和美の手だけが出されてカードを渡される。

「ナニコレ？」

つい受け取ってしまったのは不覚としか言えない。

ニタァ〜と気色悪い笑みをガラス戸越しに覗かせて和美は言った。

「プレゼント！ホテルの鍵だよ」

「はあ？」

「もうチェックイン済んでるから」

「おまえ何言ってる！」

扉を開けようと手を伸ばしたら静電気を10倍くらいにした痛みが指先にほとばしった。静電気：じゃなく電気だった。

今和美に本気出されて無事でいられないことは分かってる。質の悪いことに和美がやる気なら自分達はほぼ無抵抗に近い状態で拉致られたっておかしくない。策の無い自分なんて赤子の手だろう。

「もう堪忍しなよ。逃げ回ってるなら本気で俺のモノにしちゃうよ」「やめる！」

「好きすぎるから距離をとるなんて、好きだから虐めちゃう小学生みたいだね？まあ尚哉はそういうところあるよ」

芝居がかった仕種で和美は言った。手を出せないことを良いことに言いたい放題言いやがって…。

「尚哉」

澄んだ通る声が自分の名を呼んだ。ゴクリと生唾を吞んでしまうのは緊張からだ。

少し大人っぽく着飾った都が立っていた。息を飲むくらいの美しさは昔幼かった印象を掻き消している。

勝手に大人になられてしまったからこんなに動揺しているのだ。和美がそつと扉を開けて、棒読みで言った。

「プレゼント第二弾谷口都さんです。だいぶ冷えてるので人肌でいっぱい温めてさしあげてね（笑）」

嵌められた？

…と思うこと自体がかなり間違ってる。都と二人で部屋を取ってあるって言われて、なにも躊躇うことはないはずだ。

…はずだ。

「あのね、尚哉」

「都、今日はちよつと…」

「…嫌なら、言って？距離を置きたいの？それとも別れたいの？はつきりしないのを待ってるのは辛いよ」

「嫌なわけないだろ」

都の少し濡れた肩に手を置くと冷え切った身体が伝わってきた。

いつから待っていたのかわからないが、自分が不安にさせたせいだと思うとどうしようもなくなった。

「和美、愉しませていただきます」

腹は決まった。

どう足掻いても、都が好きなものだから。

\*\*\*

和美のプレゼントしてくれた部屋はスイートだった。誕生日プレゼントだってこんな部屋をポーンと予約できちゃうところが流石お坊ちゃま！でもきつと今までの詫びのつもりや、自分への気持ち吹っ切るためや色々、諸々が含まれたものなのだろう。難しく考えるな、と言う方が難しい。

案外身体が冷えていたようで暖かい部屋に入ると少しホッとして

しまい、無意識に壁に寄り掛かった。濡れるといけないからソファにも座れずに。

「都、風呂入って来いよ」

「え?...いい」

「なんで？」

「だって尚哉が私を避けてる理由も聞いてないし。理由次第ではここでおいとま致します」

「あれ？怒った？」

尚哉はすっかり元通りに身体に触る。ブラウスを鮮やかな手つきで脱がすとブラジャーを見て嬉しそうに笑った。

「なに？勝負下着？」

「悪い？尚哉に逢わせてやるって言われて出てきたんだもん！勝負してるし！」

「可愛い」

「尚哉にだけだよ？」

尚哉がブラジャーを両脇から掴んで引き寄せた。吸い付くように胸元に顔を埋めてそのまま舌を這わせてお腹に、スカートを剥ぎ取られて骨盤に、クルツと身体を回されて腰に、尾てい骨の辺りにキスの嵐。この儀式のような行為で自分達のスイッチを入れる。

大きな手の平が簡単に両胸をつかんで後ろからするつと確かめるように触れていった。

久々の尚哉の温もり、感触。二人の間が埋まるように身体を引つ付けた。

「都」

「んっ、え...っ？」

「俺のこと好き？」

「す、好きじゃなきゃこんなとこにいないっ！」

今更気持ちを疑われるのは心外だ。自分達は何度だって岐路に立たされてきた。その度、迷いはすれど今ここに居ることだけは疑わないで貰いたい。

だが自分の答えを耳にした瞬間の尚哉の顔に目を奪われる。幸せそうに目を細めて。

「都、ゴム一個しかないから一回だけな」

「そう…なんだ」

「そんなに残念そうにするなよ」

って笑った尚哉の手が熱っぽい。昔ほど乱暴に、調教するようなセックスは減ってしまった。発散できない熱量はこの人の中に存在するんだと感じたら、ただそれだけを味わってみたくなくなってしまった。

「なおっ」

腕を回した。

身体を重ねるように擦り付けた。

ただ、求めた。

この時のこと、後悔しない。

唇は何度も重ねた。大人になればなるほど保ってていた理性も節度も吹き飛ばして今、尚哉だけを欲した。

何度も言い回されてきた言葉だけど、一つでは無いこの身体がもどかしくて涙が出た。

愛してるんです。

大好きなんです。

あなたがいたから今の私が作られてる。

運命すら変えたんだから責任取って？ねえ？

焦らすような愛撫に堪えられなくなつて泣きながらおねだりをした。ただあなたが欲しいって。

やがて一つになれて、芯が痺れていくような快感が体中を支配していく。

幸せで、本当に幸せで、また涙が出た。

\*\*\*

抱き慣れた身体に力を入れた。制御が利かなくなつたみたいに震える身体を抑えながら都を見つめた。

少し放心気味の彼女からスルリと抜けた。ベッドにそつと寝かせると人形のような反応が返ってきて背筋に寒いものを感じた。

「都？…おいっ！」

ペチペチと頬を叩いても反応が鈍い。

咄嗟に呼吸を確認すると小さく息をしていたのでほつとして都の頭を小突いた。まだ放心解け止まぬような動きで彼女は自分の身体を掴む。

「尚哉あ私、今死んでも良いかも」

「ダメ」

「…ってくらい幸せだよ」

都は花が咲き誇るように笑った。

触れたら壊れてしまいそうな身体を包み込むように腕を回した。

「都、一緒に暮らそう？」

「尚哉、私のこと避けてたんじゃなかったの？」

「俺のいないところでお前が勝手に変わってくから嫌なんだよ」

「…拗ねてたの？ヤダー！可愛いねー」

からかう都の頭を掴んでギューツと押し潰した。わざとらしい悲鳴が聞こえてきてじゃれあうように二人で絡み合った。

唯一の愛しい人。

ふいに都がこちらに向きなおって自分の瞳を見つめる。

「良いよ！一緒に暮らそう！」

初めての快い返事。渋られる度にいつのまにか心は臆病になっていったのだ。

都のその言葉だけで涙が流れた。

都はギョツとした表情でシートをハンカチがわりにゴシゴシ顔を拭く。痛いくらいの力の入りようになんだか笑えてきて、シート越しから都の腕を掴んだ。

顔が見えた瞬間に彼女の身体をさらって抱き上げる。

「もう離さないけどな」

「こっちのセリフ！…あ、でもこっちの谷口の蔵を急に畳むわけにはいかないから調整は必要です」

「俺がそっちに住む」

「あ！それ名案だね！」

そう言いながら彼女の唇を奪った。

目が合った瞬間に調子づいて口にする。

「結婚する？」

「あ、それはダメ！学生で親の庇護下にいる人とは結婚できませんよ」

ぶつちやけて、容姿端麗、家柄良し、将来有望、身体の相性も良し。都にとつて何一つ悪い条件は無いと思うのだ。それをきっぱり、あっさり。

ふられているのに相変わらずの谷口都で安心して居る自分も居る。このくらい難易度の高い女でいてくれなきゃ、この先楽しめないから。

都は思い出したように自分の側を離れると濡れてクタクタになってしまった紙袋からリボンの掛かった箱を取り出した。

こちらに差し出すように渡す。受け取ると、見掛けより結構重みのあるそれに危つく落としそうになった。

「開けて良い？」

「うん！お誕生日おめでとつ。あと大学進学おめでとつございます」  
「ありがとう」

包装紙を開けて出てきたのは桐の箱。その中にはペアの美しいグラスが二客。

「……………江戸切子？」

「さすがにお育ちが良いと目も利くのね」

「これ高いだろ？」

「それは無粋です」

「ペア……………？」

「結婚は5年後ぐらいにね？」

都は言った。

一緒に住むことは、口説かれたのではなく一緒に選んだ道だと。  
グラスを掴んだまま、暫くニヤニヤするのが止められないだろうな。

後日／ふたつ。（後書き）

ヘタレはヘタレです。

尚哉、どうしてもハチャメチャ彼女と暴君和美に振り回されていくんです。

これから大概そういう方向です。（都とくつつかない設定だったときも次の話は大概）

## 新・神様の蔵の守人

### 新・神の蔵の守人

それは無限。種類は数限りなく存在する彼の大陸の奥深き料理。決戦は彼の家のキッチン。

豚ひき肉、ニラ、ねぎ、生姜、キャベツ。

「ニンニクは入れないのが正解だってタモさんもいいともで言っただ！」

「ニンニクを入れたやつが良い。精力着くし」

「明日学校なのに……」

「消臭ニンニク使えば臭いは残らないよ」

「そんな偽物のニンニク使ってまで偽物餃子作りたくないもん」

「じゃあお前は食うなよ」

言い争いが終わらぬうちに相変わらずの暴君、飛澤尚哉はニンニクをバサバサと満遍なくばらまく。それこそ回収は不能なくらいに横暴の主に抗議しようと彼を睨んだ。だがそんなものともせず、にそれはそれは美しく微笑んで彼は言う。

「良いじゃん。同じもの食べて、同じキスの味。身体を構成されるものが揃ってくみたいで俺は好き。ちゃんと食いなよ、俺が美味しく作ってやるから」

殺し文句。

ま、いいか。…簡単な自分に呆れる。

尚哉はウェイパーを入れて塩胡椒。ゴマ油を少々。手際よく入れた。

味付けで美味しくしてくれるのは確かなのだろうが、ここから包むのは二人でやる。俺が全部やった手柄みたいに言われるのもムカつくが、そこは彼の顔を立てて黙った。

二人で作ったものが美味しく出来ますように……。

一つ一つに思いを込めながら包むと何よりのご馳走に見えてきて…。

「うーんでもさ…作つてるとお腹いっぱいになるよね？」

「都、ケンカ売ってる？」

「お蕎麦食べたい！食べたくない？」

「餃子どうするんだよっ！」

「冷凍！」

「ワッガママ！」

「さっぱりしたものが食べたいんだもん」

「じゃあやっぱり餃子だな」

「さっぱり？どこが？」

「水餃子にしよう」

「む…致し方ない」

「武士かよ…」

「侍魂的には餃子なんて邪道だわ。やっぱり十割蕎麦かしら？」

「うるせー！ニンニク餃子は日本の家庭料理なんだよっ！」

「普通のご家庭に育ってないくせによく言うわね」

鼻で笑い飛ばしてやったら尚哉はボールの中の生肉を弾き飛ばしてきた。

「なっ！？生肉はやめてっ！食べ物だめっ！」

「餃子をあくまで愚弄するお前に反論は出来ないはずだ！」

「最初に愚弄したのは尚哉だし。ニンニク入れたしい」

「ニンニク餃子を馬鹿にするな！もういい！食うな！」

「ああっ！嘘！食べる！」

「食べたい？」

「っ…食べたいよお」

破顔した尚哉の表情で仕方ないなあと思ってしまう自分が一番仕方ないのだ。

こうやって笑って喋って料理をする過程を過ごしたただけで料理はなんでも構わない。

頬に付いた生肉のカケラを尚哉の手が拭った。

彼の腕が材料のボールから離れたその瞬間を待っていたのだ。狙い定めていた獲物を流れるようにつかみ取ってボールの中に流し込んだ。尚哉がそれを見つけた時にはすでに回収不能なくらいに混ざり合う。

「お前っ！？…ミヤコちゃん？何入れた？」

「椎茸のみじん切り。コクが出て美味しいよぉ！」

「俺が嫌いなもの知ってて…」

「絶対美味しいから食べてみなよぉ！」

「食えるかつ！！あんな菌の塊！」

「松茸は食うくせに…」

「庶民とは舌が違うんだよ！この愚民！」

「じゃあトリユフでも入れれば気が済んだのかよ！このバカ王子！」

\*\*\*

「…と、まあこんな感じでね」

ふー、つと息を吐く都はこの一連のくだらない痴話ケンカの張本人には到底見えない。

一見可憐な美少女に見えるのだ。

しかし振った相手にこんな愚痴を吐く無神経さ。どうでもいい内容の痴話喧嘩も嘘偽り無くやってきたのだろう。

「結局何食べたの？」

「尚哉がうどん作って出してくれた」

「仲直りしたんじゃん」

「和美…勝手にヤツが作って出しただけ。しかも食べたあとお金取られた」

「それは…本当に怒ってるね」

尚哉はお金取るなんてセコいこと普段なら絶対しない。そして都も食事一食や二食抜いても気にしない。

…気にしないから尚哉はお金を取って制裁したのだ。

(尚哉…母みたいになつてきたな…)

ケンカはしても飯は食わすってなんか笑える。

でもそれだけ絆が深いように見えて悲しくなった。

自分の本気で好きな気持ちがちつとも伝わってない気がして。

そんなことは無いってことも、自分がただネガティブなのも知ってる。

だから鍛練がわりに都の他愛ないのろけ話を聞くことにしたんだ。

「じゃあ今夜は餃子？」

何気なく尋ねたら都が酷く悲しい顔をして俯いた。

「ヤツは餃子の皮をうどんにして食ってしまった…」

「じゃあそんなに餃子でケンカしてるのに肝心の餃子は未だに出来上がってはいないと？」

「肉は…冷凍してある」

「もう団子にして食べ！」

「餃子にするんだもん…」

「変な意地と変なわがままのせいで餃子が餃子になるチャンスを逸してる…」

「だって！」

「もうっ、超どうでもいいんですけどっ！他人には飛んでる蚊よりもどうでもいい！」

「酷い！仲直りの方法一緒に考えてよお！」

「謝れよ！それでイチコロだろ！」

「それは嫌あーっ！」

「意地っ張り！」

「尚哉が悪いんだもん！」

「どっちもどっちだよ！」

言い争ってるうちに生徒会室の窓から見える位置に見慣れた赤いオープンカーが停まった。

本校舎から少し外れた生徒会室、ここに都が逃げ込んで来ている

と予想してのことだろう。わざとここにしか見えない位置に停車させてるのだ。

「お迎え、来たよ」

「あ…」

少し頬を染めて窓の外を見る彼女は本当に可愛い。正直言って、形容詞として『美しい』とか『綺麗』とかのが似合う彼女だが、尚哉の前では『可愛い』んだ。だから諦めることにした。

だからこそ…

「都、こんなことでケンカするなら俺が奪ってあげるのに…」

「こんなふうにケンカできる仲になりたかったのよ」

それはそれは美しく、笑うのだ。

「ならしつかりケンカしてきなさい」

自分の言葉に困ったような、照れたような微笑みを返すのも可愛らしいと……思うのだ。

結局つかず離れずの位置を居心地が良いとお互いに思っているから、なのだろう。

「そういえば都、道具士資格が正式に剥奪されるらしいね？おめでとぅ」

「おめでたくは…無いでしょ？私、本当に蔵守になるつもりだったのに…」

「ねえ、神様の相方になる人間を何て言うか知ってる？」

「ん？和美が相方でしょ？」

「道具士、って言うんでしょ？都の道具士は誰になるのかな？」

「え…？」

都は本気で困った顔をして天を仰ぐ。少しして、荷物をパパッとまとめると苦笑気味に呟いた。

「私是要らないや。だって自分より腕の良い道具士いないもん」

別に…都の相方を譲る気は少しも無い。だが今回の人事を神だとも思ってしまう。

二人の未来に幸あれ。

\*\*\*

「尚哉！」

勢いよく走り込んで……これではまるで逢いたくても逢えないとばかりだ、と気付き息を整えた。

あくまで平静を装って、でもこれ以上彼を怒らせても何も良いことは無い。

だってイチャイチャしたいし、一緒にいたい。大好きなのは変えられない。

「急に迎えに来て……どうしたの？」

少し落ち着いた大人の女性を演出。

自分を視界に入れた尚哉はモノッ 凄い顔を顰めて小さな声で呟いた。

あまりにも小さくて聞き逃した。

「なに？」

「……都様の専属道具士として一重より選出されました飛澤尚哉です」

「へ？」

「だから！オマエの専属道具士になったんだよ！」

「え？………なんで？」

「オマエが道具士を持ってないからだろうが！」

「え？え？だって………尚哉は道具士じゃないじゃん」

「神様の専属なんだから格が上じやなきゃダメだろうってことになったらしい。後はオマエの兄貴が周りを言いくるめて俺が初代・神の道具士」

「それって………」

「都、ずっと一緒に居て良いつてことだろ？」

苦笑混じりに尚哉は目を細めた。

その瞬間、尚哉の身体に飛びつくようにしがみついた。彼は軽々

と自分の身体を抱き留める。

「ごめん、尚哉…………私嬉しい」

「俺だつて…………悔しいけど嬉しいんだよっ！」

車に押し付けられるような格好で相変わらず無理矢理な口付け。  
少し乱暴なくらいのその腕が好き。

助手席に押し込められると運転席に回り込んだ尚哉が慣れた手つきで車を発進させる。

「取りあえず…………しばらく見習いつてことで」

「え？…………あ、道具士の修行？どこかの蔵に修行に行くの？」

「…………九希がオマエに習えばいいって」

「え？本当？本当？」

こんな偉そうな尚哉が弟子なんて面白すぎる。

と面白がつていたらシートベルトを締める前に急発進・急ブレーキ。前につんのめつた自分の姿を嘲笑うように彼は言った。

「危ないからベルトは締めなよ」

「ベルト締める前に出しちゃダメなんですっ！」

「はいはい。おこらないの」

「もうっ！尚哉！」

「都、今日餃子だけど平気？」

「え？」

「金曜日だから良いだろ？」

「うん！椎茸入りで良いなら」

「……………大きいのは昨日の夜に全部抜いた」

「はあ？みじん切りを？」

「嫌いなんだよ！仕方ないだろ！」

「尚哉、それも修行です」

「関係ないし。じゃあオマエはスクランブルエッグ食えんのかよっ  
！」

「無理！あれ食べ物じゃない！」

「それと一緒に」

そっ  
かあ  
……  
。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8091q/>

---

唯一のモノ

2011年7月12日03時17分発行